

---

# 学ランと兎

shiraha

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学ランと兎

### 【Nコード】

N5164T

### 【作者名】

shiraha

### 【あらすじ】

梶平雨紗は並盛中に入ったばかりのピカピカの一年生。毎日遅刻ばかりしてた彼女の行く手を阻んだのはもちろん風紀委員長の雲雀恭弥だった。そしてこの出会いが雨紗の人生を変えて行く。

## 木の上の草食動物（前書き）

リボーンの日常編が大好きで、実は前から温めていた小説です。主人公はオリキャラの雨紗ちゃんなので他のキャラに負けないように！と思っています。

## 木の上の草食動物

「んーしょつ。」

ここ波盛中に入学して十日が立った。毎日遅刻ギリギリで私は私だけの校舎に入る近道を見つけた。それは。

「ワオ。猿かい？」

ズルッ

「きゃあ！」

説明しよう！私は木から二階の廊下にいつも渡っていたのだ。スゴいでしょ。でも声にびっくりしてあろうことが滑ったんだよ。

ヒュー

私死ぬかな？

ドスン

「いったあ。」

生きてる！立ち上がろうとすると嫌な音がした。

ミシ

「君 梶平雨紗かじひるさでしょ？」

顔を歪める私を気にせず聞いて来た。

「なんで知ってるんですか！？もしかして…ムツリストーリーカー？」

「さあね。」

「委員長！」

リーゼントで枝を加えた人が近づいて来た。

「草壁。うるさい。」

ガッ

「ギャア」

え、今棒みたいので殴った？どうしよう体痛くて動かないよ！

「雨紗。僕についておいで。」

「あなた誰？」

「僕？風紀委員長さ。」

…。

「はあ。だから何ですか？」

「怪我したみたいだね。」

会話が噛み合わない。

「はい。いいですよ。保険室行くんで。」

「何も分かってないようだね。今保険医いないんだよ。」

「ほんとですかあ！？」

次の瞬間 私は担がれていた。

「きゃ！パンツ見えるー！！」

「最初から見えてるよ。」

彼の細い体のどこに力があるのか謎だが 私を抱えて歩き出した。

「あー！私遅刻だあ。」

「君毎日遅刻だよね。」

「え！？近道してたのに！」

「風紀委員が靴箱チェックしてるんだ。」

「ってか 急いでくれませんか？体さらに痛くなってるし。」

「やだ。」

私はこの人がどんな人物なんて知らなかった。見た目真面目そうだし？さっきのリーゼントは気になるけど。

「着いたよ。」ドサ

「あだー！」

「君　うるさい。」

応接室？なんで応接室なのかな。私お客さんじゃないし。

これが私梶平雨紗と風紀委員長雲雀恭弥の出会いだったのかも知れない。



## おとりの生足（前書き）

すいません。ちょいエロです。

## おとりの生足

応接室のドアの前。風紀委員長はガチャッと鍵を開けた。

後に続くこうとすると

「入らないでね。ここは僕のテリトリーだから。」

「すぐに棒を向けしないで下さい！危ないですよ！！」

「雨紗の方が危ないよ。いつもパンツ見せて…誘ってるのかい？」

スタスタ歩きながら セクハラ発言してきた。

「さ…さそお！？」

「男なんてパンツで興奮するのさ。」

ツカツカと救急箱を手に委員長が近づいてくる。

「足開きなよ。」

「ちょっと『冗談止めて下さい!』」

「太股の内側がひどく切れてる。」

「じ、自分でします!」

「早く開きなよ。」

目が怖いよ。そうだ!

「卑猥だね。そんな所隠したら…気になるよ。」

「開いたんでお願いします。」

ん?何か今まずい事言ったかな。

「クス… お願いって。雨紗、僕が欲しいのかい?」

やっぱり!?

「先輩じゃなくて消毒して欲しいんです。」

委員長がペロリと傷口を舐めた。

「ひゃあ！」

「雨紗…もう我慢できないよ。」

色っぽい表情の委員長に 体が熱くなる。

「あの！名前教えてください！」

「恭弥。雲雀恭弥だよ。」

「恭弥サン？」

「サン付けしたらウサギって呼ぶから。」

ムスツとした子供みたいな顔で言われたから思わず笑ってしまった。  
とりあえず話をそらせた。自分：よくやった！

「そろそろ僕の応接室に入るかい？」

「いいんですか？」

「あまりよくないけど雨紗は面白いからいいよ。それに、運動神経  
いいんでしょ？今すぐでも勝負したいとこだよ。」

ギラーン

と恭弥の手のトンファーが光った。私も恭弥と話す時だけガードで  
きる何かを持ちたいなあ。

「ねえ。入らないの？」

「失礼します！」

ガラガラ…ピシヤン  
これぞザ・密室！

「僕、草食動物を咬み殺すのが趣味なんだ。」

さつき、名前が草食動物みたいって言われたよね。しかもあの不自然な微笑みは何？

「このお礼に手伝ってくれるよね？」

（脳内転換）怪我を治療したんだから手伝え。

「…はい。」

いたいけな草食動物を咬み殺すなんて動物虐待なのに、私を巻き込むなんて風紀乱れてんのこの人じゃん。

私は中学生と言う若さでバイクに乗る恭弥の後ろにしがみついていた。

「いやー！」

「着いた。ここがスポットだよ。何してるの？早く降りて。」

暴走バイクに酔いました。クラクラ立ちくらみがする。

「そこに立っててね。」

小さい工場か何かの廃虚に私は一人立たされた。恭弥は…あれ？いない。うそ、置いてかれた？

「お嬢ちゃん可愛いね。」

「生足じゃん！」

後ろを振り向くとその道のお兄さま二人。ヤラレル！

「ねえ。ここは立ち入り禁止なんだけど。」

「げ！」

「雲雀恭弥！」

「もう遅いよ。咬み殺す！」

ガンッガンッ

「ぎゃあー！」

「助けてえ！」

ガタイのいいお兄さんたちは一瞬にして倒れた。

ビュッ

トンファアの血をはらう音。

「…あんな弱い奴らボロボロにする価値もない。」

「私っておとり？」

「…ティツシュ配りみたいなモノだよ。」

ドキドキした。悪い事をしたような背徳感と、よく分からない好奇心。

バイクに乗せてもらい、向かった先は…



「学校ですか？」

「僕には仕事が残ってるから。じゃ、明日遅刻したら咬み殺すからね。」

こんなに振り回される日が来るなんて。胸がざわついていた。

## 不器用な目線

わーい。教室一番乗りだあ。

しーん。

「あー暇だなあ。」

恭弥に咬み殺されないように気合いを入れたら早く来すぎてしまった。

ガララ

「あれ梶平？珍しくはえーな。」

「山本は朝練かあ。私だって早起きもしますーだ。」

さわやかで人気の山本。あんまりしゃべる機会がないからちよっと嬉しい。

山本が隣に座って来た。

「梶平って野球部に人気なんだぜ。」

「え？からかわないですよ！」

「ほんとなのにな。やべ 準備運動始まってっしーじゃーな。」

山本は走って教室から出て行った。

人気者って違うなあ。

しばらくすると京子や花が登校して来た。

「雨紗おはよう。」

「雨紗ちゃん昨日どうしたの？」

ツボン

「あ、あれだよ。」

「何真っ赤になってるの？あやしい。」

「雨紗ちゃん熱でもあるんじゃない？」

「ち 違うよ！熱もないし。」

そこで鐘が鳴った。

「ほら二人とも席に着く！」

「はいはい。行くよ京子。」

「うん。」

絶対に言えない。雲雀先輩との事。ってかよく分からないよ。

休み時間にツナがいじられてた。かわいいからしょうがないよね。

「ツナ。ちょっと来て。」

「雨紗ちゃん！？」

私はツナの手を無理矢理引いて廊下に出た。ツナをいじってた男子からブーイングを受けたけど無視した。

「雨紗ちゃんどこ行くの？」

「あ、ごめん。」

「もうチャイム鳴るよ?」

ツナは何でこんなになよなよしてるんだろう。

「ツナ! あいつらに言っちゃいなよ。」

「いいんだ。僕はダメツナだし。」

私は教室に戻る為に走った。そして窓から木を伝って窓に。

「間に合った。ツナに悪い事したかなあ。」

遅れてツナが戻って来た。

そして三時限目の体育。

「あれ? 雨紗体育見学?」

「ん。ちょっと足を怪我しちゃった。」

「体育好きなのね。」  
「うん。」

今体育座りして 見学中です。

「やあ。」

《雲雀さん！？》

私も驚いたけど周りの反応が過剰すぎてまるで 怪物を見るように  
後ずさりしていた。

「へ？どうしたのみんな！？」

「雲雀君見回りお疲れ様です！」

体育の崎岡が深々と頭を下げた。

「僕の事は良いから体育続けなよ。僕も見学するからさ。」

私以外の全員が真っ青な顔をした。

「早く死なよ。」

今死なよって言ってない？崎岡先生が慌ててみんなを集合させた。

「はあ。疲れたよ。」

「雲雀先輩どうしたんですか？」

ゆっくり私の隣に座った。今日は体育館だから制服は汚れない。

「君の怪我が気になって…とは言わない。」

「ええ!？」

「君がまた木から校舎に渡るの見たんだよね。しかも今日。」

しまった。ツナを引っ張りまわして授業に遅れそうになったから自分だけ近道したの見えるなんて。めちゃくちゃ自業自得じゃん！

「なんでサボってるんだい？」

「う…。あれは習慣のせいといいますか。」

「困るんだよね。校内で死者が出ると。」

バレーボールをする様子を見ながら 普通のトーンで言った。

あまりにも普通に言うから聞き流すところで。

「死！？何言ってるんですか？」

「君打ち所悪いと人は死ぬんだよ。」

確かに 落ちた時は死ぬかと思っただけ。

「死ぬとか簡単に言わないで下さい！！」

私は立ち上がって先輩に反抗した。

体育館に響く私の声。周りのみんなが固まる。

「…いきなりうるさいよ。あの日は僕がいたから助かったんだ。」

「先輩見てただけじゃないですか！」

先輩も立ち上がる。目線が気にいらなかったらしい。



「もう君とは口を聞かない。」

スタスタと体育館を出て行った。

「私だって口なんか聞かないから。」

授業中に堂々と喧嘩出来たのは雲雀恭弥の権力のおかげとは雨紗は知らなかった。

## 草壁先輩

恭弥と喧嘩してから花に忠告された。

【雲雀恭弥とは関わるな！】

京子によると2年の兄が『絶対に近づいてはならん！変人だからな。』とかいつも言ってるらしい。

私から見たら京子のお兄さんもよっぽど変わり者なだけだね。

私は一人で図書室に向かって歩いていった。

あれ？草壁先輩だよな。

「草壁先輩！」

「梶平か。お前も図書室に用か？」

歩きながら話していると すれ違う人たちが頭を下げていた。

「図書室って落ち着くんですよ。恭弥先輩について聞きたいんですよ。」

ガララと草壁先輩が図書室の扉を開けた。

「直接聞いた方がいい。」

「そうですね。」

私は本棚の間にしゃがみこんだ。

「君…邪魔。」

上から恭弥の声がした。

「恭弥！」

「はあ。相変わらずうるさい。」

恭弥は私の腕を持ち上げて立たせた。

「聞きたい事って 何？」

「！草壁先輩早いなあ。私と口を聞かないんじゃないんですか？」

「質問に答えなよ。」

先輩の顔が迫って来た。息がかかるくらいに。

「あう。よくよく考えたんですが…ひょっとして心配してくれたんですか？言葉は酷かったけど…。」

「…さあね。僕もう行くよ。」

先輩がいなくなると思ったら咄嗟に学ランを掴んだ。

パサッ

学ランだけ握った形になる。恭弥はいつも学ランを肩にかけていたから…。

「学ラン好きなの？」

「違いますよ！！先輩私の事嫌いですか？」

気がつくとも学ランを胸の前で握りしめ…抱きしめていた。

「ワオ。僕が君を？」

「だってもう名前を呼んでくれないの？」

なんでだろう 目が曇って見えない。恭弥に引っ張られてバランスを崩した。

「ひえ？」

目の前にはYシャツ。暖かい胸に包まれていた。

「ねえ。雨紗は僕に泣き落としが通用すると思ったかい？」

そっか 目がボヤけるのは涙のせい。

肩を掴み私を少しだけ離れた。そして顎を上げて。

「雨紗。可愛いよ。」

耳元で

「小動物みたい。」

体が熱くなる。これを恋って呼ぶのかはまだ分からないけど。

恭弥には嫌われたくないって思った。

## 利用されたキス

恭弥と私の関係ってなんだろう。

そんなこと考えてたら急いでるらしい恭弥とすれ違った。

眼中にも無いのね。

「…ちよつと来て。」

通りすぎた恭弥がまた私を強引に引つ張る。また振り回されてるよ私。

「ここ、裏庭ですね。」

「しっ…。」

風紀委員が中庭でたむろってる。

「今カップル狩りが多発してるんだけど。」

先輩は学ランを脱いでブレザーになった。

しばらくすると疑われてる風紀委員が近づいて来た。

「先輩どうす…」

ちゅう…

え？何これ？キスされてる。

結局カップル狩りの風紀委員は咬み殺されてた。

キスして顔を隠しただけの話らしいけど、顔色一つ変えない恭弥を見たら動揺してる自分が悔しくなった。

…

「雨紗！」



息を切らせてツナが走って来た。

「ん？ツナどつたの。」

「雲雀さんと付き合ってるってほんと？」

ベタすぎだけど私はジュ スを吹き出した。

「あ…ごめん。ティッシュはい。急に何？」

顔にかかったジュ スをふきながらツナが言った。

「スゴい噂だよ。あの並盛最強の不良の頂点に君臨する雲雀さんを落とした女だとか。」

「はい？恭弥先輩ってそんなに有名な人だったの？？」

ツナは心の中で突っ込んでいた。知らなかったのかよ！！！！と。

「そついえばり ゼントに囲まれて血まみれで棒振り回して学ランだよ。」

「学ラン関係ないだろ　　！！！でほんとなの？」

「んー。チューはしたけど。」

「は！？」

ねずみの鳴き声みたいなの言わなかった！？とツナは混乱した。

「雨紗。」

「恭弥先輩！何か用ですか？」

目がお前消えろと言っている！！！！とツナは気付いた。

全力で走り出すツナ。

「あれ？ツナ何だったのかな。」

「良いものを手に入れたんだ。行くよ。」

雨紗の腕を無理矢理引っ張る雲雀は 妖しく笑っていた。

「い 痛い。先輩絶対変な事しないで下さいよ!」

「ワオ。雨紗意外と知識あるのかい？」

「何の知識ですかあ!」

一番可哀想なのは ツナでした。

見せたいモノ

僕は最初から聞いていた。君と沢田綱吉の会話を。

「先輩？腕…痛いです。」

僕はずっと君の腕をつかんでいたようだ。ゆっくり離れた。

「先輩？」

小さな君の上目使いにやられない男はいないだろう。ムカツク。

「良いものが見たいかい？」

君は少し体をびくつかせた。僕がそんなに怖いのか？

「ちょっと興味あります。恭弥先輩の良いものってなんだろう。」

ちらっと僕を見るのが君の癖。雨紗は僕の気持ちに気付かないのかい？

「先輩？さっきからば　としてますよ。」

雨紗は頬を膨らました。可愛い…。

「良いものっていうのは…これだよ。」

「ジャンプの最新刊ですか？」

雨紗がきょとした。僕外した…？

「ありがとうございます！嬉しい。この赤マルジャンプ見た事ないから！」

「…これジャンプじゃないのかい？」

「えっと、大丈夫です！」

気をつかってない？無理した笑顔だし。

ポン ポン

「落ち込まないで下さい。」

僕頭撫でられてる？でもなんか嬉しい…。しかも背伸び一生懸命して足…プルプルしてる。鼻血が出そう。

「雨紗…。」

「ひゃあ！」

「可愛いすぎ。僕、雨紗が好きなんだ。」

「せ…んぱい。」

抱きしめる手に力が入る。

「私も好きです。」

「…！雨紗…！」

僕は少し離して雨紗の顔を確認めた。

「…多分。」

え？何コレ。

嘘。

今までの甘い雰囲気何？

「先輩？」

ちゅ

「手に入れて見せるからね。」

「そこまで…ジャンプくらい買えますよ!!」

僕のお姫様は相当鈍い。でもその分楽しめるから。いつか僕だけのモノになってよね。





## 昼下がりの図書室

僕 雨紗が好きなんだ

あなたの言葉で魔法にかかってしまったの。

もう私は蜘蛛の巣にかかった虫みたいにあなたにとらわれた。

だけど まだあなたには伝えない。この気持ちを伝えたら離れて行くような…。そんな気がする。

「雨紗。」

「恭弥先輩…。」

どうして恭弥の事考えてたら来てくれるんだろ。

図書室の椅子に座っていた私の隣に先輩は座った。

「元気ないね。」

「そんなこと…。」

恭弥の人を見透かした様な目に耐えられなくてそらしてしまう。だから先輩にだけ目をそらす癖がある。それは好きだから。

「僕がいると邪魔かい？」

先輩がそんな事言うなんて…私は先輩を見た。

ニヤリと妖しく笑う先輩。絶対わざとだ。

「邪魔なわけですよ。」

「ワオ。反抗的な目だね。そそるよ。」

「そ…!？」

いつの間にか肩に手が回っていた。私めちゃくちや口説かれてません??

「何？」

「か、顔近づいてますって!！」

「ふうん。」

「ふうんじゃなくて!みんなに見られますよ!」

しーん

周りには誰もいない。

「なんでえ!？」

「僕が咬み殺しといたよ。」

「はい？」

ガタン

「もう黙ってよね。」

このままやすやすとキスを許して良いのか!？私簡単な女と思われ

ちやうよ！

「ふわぁ！」

ピタッ

恭弥に抱きしめられた。

「はぁ。そんな可愛い声出さないでよ。」

「な…なんですかぁ！？」

なんかなんかなんか机に押し倒されてるし。こんな体制だとパンツが見えてるよ！

「雨紗って何でこんなにふわふわしてるんだろ。」

「ちょっと待った！どさくさに紛れて体触らないでよー！」

「…何で？」

この体制で目が合うとき 気まずい。

「う。スタイル良くないし。」

って私何言ってるの？

「僕が大きくしてあげるよ。」

「ぶあ！何の話しだあ！！！」

ガタン

恭弥が立ち上がった。その後私を起こしてくれて。

「今日はこのくらいで許してあげるよ。」

触れるくらいの優しいキスをくれた。

「ちゃんと授業出なよ。」

先輩はすぐに図書室からいなくなった。

「かつこよすぎ。」

小さなつぶやきに自分自身気付かなかった。

## 月夜に光る瞳

ジャンプの発売日って事で私は夜 コンビニに行くために一人歩いていた。

ガサガサ

塀の向こうの木が揺れる音がしたと思ったその時！

ヒュッ

「き…やあっ！」

何かが降って来て反射的に私はしゃがんで頭を隠した。

黒い物体はぬらっと動いて…。

「やあ。」

え？このセクシーボイスは。

「ひ ひ ひ ひ ばり先輩!？」

私は腕を持ち上げられて デジャブ？

「僕そんな名前じゃないよ。こんな時間に何してんの？」

「びつくりさせないで下さいよ! つか人には高い所登るなっ。」

月明かりに照らされた目が光って 怖さ倍増! 思わずフリーズしたよ。

「雨紗さ。僕の質問無視してかまって欲しいの?」

「ひ! コンビニ行くだけです。」

「駄目だよ。未成年がこんな時間に一人でうろついちゃ…並盛の風紀に関わる。」

「先輩も未成年じゃないですか! それにジャンプの発売日なんです。」



恭弥はおもむろに何かを取り出した。

「…これかい？」

「ま…まさか。盗みを!？」

ヒュンヒュン ヒュンヒュン

「何？」

パツと電灯の灯りがともった。先輩は血まみれでジャンプも血が飛び散っていて ホラーとしか言えない。

「すえ ん ぷぁい。」

「これ？返り血だから。ベとついてムカつくけどね。」

「棒振り回さないで下さい。」

「…棒とか言わない方がいいよ。男が喜ぶからね。」

「？」

「ご褒美にこれをあげる。」

「話が見えません!!」

結局先輩に送ってもらい 血がこびりついたジャンプをもらって微妙な心境になった。

「ってこれ先週号じゃん!!」

フ フ フンンン な み も り の

窓の外から恭弥の鼻歌が聞こえて来た気がしたけど これ以上突っ込まない様に…

「突っ込むと言ったら男が喜ぶよ。」

「勝手に部屋に入って来ないでえええ!!」

本気で先輩何してたんだろ!?

草壁の家にはただです。お仕置きしにね。

## 赤ちゃんのりぼん

朝から応接室に招かれ困惑していると窓から何かが侵入して来た。

「ちゃおっす！」

「赤ちゃん？まさか先輩誘拐したんじゃ…。」

ヒュッ

右手のトンファーが私の左頬をかすった。つまりものすごい速さで飛んで来たのだ。

ガス…

私の後ろの壁にめり込んでるし。

「僕を何だと思ってるの？」

「風紀委員長です！」

「梶平雨紗か。おもしれえ女だな。」

この赤ちゃん滑舌良くない？

「赤ちゃんじゃねえ。俺はダメツナの家庭教師リボーンだ。」

カチッ

額に何か当たってるんだけど、玩具かな？

「りぼんちゃん？お姉さんは遊んでる暇無いの。」  
ガラガラ…

「リボーン何してんだよ！雨紗ちゃんそれ本物だよ！」

「ツナ？」

「お前が死ぬ気で助ける。」

ズガン！

ツナはパンツいっちょに変身した。

「死ぬ気で雨紗ちゃんを助ける！」

「へ？」

ツナに姫抱きされた。応接室を出ようとするが恭弥に行く手を阻まれる。

「ワオ。ギャグかい？」

「うおおお！」

「ちょっと！私に当たるから！」

二人のバトルを間近で見れて貴重な体験だな。

が。ツナが普通に帰り、一方的にやられた。

「りぼんちゃんは？」

「いたたた…。リボンのやつ！」

「いつまで群れる気？」

群れる？

「雨紗ちゃん逃げるよ！」

「え？ツナ？」

今までになくギラついた恭弥を見るとヤバいらしい。教室に戻りたかったからツナの後に続いた。

「どこに行くのかい？」

トンファーと共に前に瞬間移動している。

「リボーン！」

「全くこれだからダメツナは。自業自得だ。やられる。」

「お！雨紗！授業遅れるぜ！」

山本の出現により私は助かったが、その後包帯だらけのツナが教室に入って来て救急車で運ばれたのだった。

「ツナ何がしたかったんだろ。」

「アイツおもしれえのな!」

こうして恭弥のストレスは発散されたとか。



## 山本視点

《キヤア！！》

廊下からスゴい黄色い声が聞こえて来た。いつも寝ている山本が顔を上げた。

「何だ？」

ダメツナと呼ばれるツナが廊下に走って行った。

トイレに行きたくなくなったから 俺も廊下に出た。

それを見た瞬間 一気に目が覚めた。学校で恐れられてるのに有名な雲雀恭弥が女を担いでいた。しかもお姫様抱っこかゆうやつ。

他のヤツらも顔が気になるのか覗き込むやつもいた。

「咬み殺すよ。」

と言っ言葉を浴びせられていたけどな。俺もトイレに行くのを忘れ

て雲雀をすれ違ふ時見えた。

「梶平？」

学ランをかけられ大切そうに運ばれるほど　ヒバリに想われる女が  
いるだけでも驚きなのに。

「マジかよ。」

ツナが必死に二人を追いかけていた。

「やべ。漏れるぜ。」

ツナと梶平仲良いからなあ。俺は足早にトイレに向かった。

「のは良かったけど。俺何でここに来たんだ？」

そう。俺は応接室の前に立っていた。

「まいったなあ。」

ポリポリと頭をかいた。

「や…山本？」

ツナも隠れていたらしく俺に話しかけてきた。

「おう。ツナか。」

ポリポリ頬をかく俺にツナが必死に話して来た。

「駄目なんだ！雲雀さんに梶平は傷つけられるだけだよ！！」

「梶平の事好きなのか？」

やべ。口が滑った。

「雨紗ちゃんは恩人なんだ。」

ツナの真剣な顔に 何も言えなくなった。

ツナの話聞きながら俺は

まるで王子様だな

と思った。果たして誰が？

ヒバリ？ ツナ？ まさか俺とか。

ただ一人 お姫様って役柄は梶平。

ただツナと俺には ヒバリは敵。悪魔。クッパ。

「行くぞ。ツナ。」

「え？話聞いてた！？」

「悪い。聞いてないわ。ここを蹴って 姫を救おうぜ。」

バッチンとウインクした。

ガンッ

「山本お！ここ引き戸だから開かないよ！！」

「まあ 見とけて。」

ガチャ  
ガララ

「君 誰？邪魔しないでくれ……」

「「梶平！！」」

俺とツナは応接室に駆け込んだ。

「ひゃあ！」

はだけたブラウス。学ランで隠しきれない赤い印。

「えっ え え「エッチな。」したの？」

「君に言う必要は無い。」

「ひ ひ ヒバリさんでも雨紗ちゃんを傷つけたら許さない!」

「「ツナ…。」」

俺と梶平の声が重なった。

「へえ。僕が強姦したとでも?」

ヒバリは目が笑って無かった まさに瞳孔が開いているという感じ  
なのな。

「だって雨紗ちゃんはだ…はだっ「はだけてるって言いたいのな。」  
し。き…き「キスマーク。」が付いて涙目だったから…。」

「君自分で言えないのかい?」

「ツナは恥ずかしがりやなのな。」

「雨紗は僕のモノ。」

ヒバリの言葉にしーんと静まる。まあ噂に聞いてたけどな。

俺ショックかも。ツナはもっと衝撃受けて青白い。

パンッ

誰もが驚いた。ただし男は。

「最低！私の事モノって思ってたの？」

「ワオ。僕は雨紗の事好きって言いたいんだよ。」

俺達が騒いでる間に着替えたらしい梶平はヒバリを睨んでいた。

ヒバリの頬はまともに受けた平手打ちで赤くなっている。

「やっぱり 私なんて先輩の愛人の一人なんですね!？」

何か昼ドラ入ってねーか？ツナも衝撃受けてるしな。

「ふうん。だったらナニ？」

意外とヒバリノリノリだし。

「うー。」

「分かったようだね。」

やっぱり付き合ってたんだ。こいつら。

「ツナ行くぞ。」

俺とツナは応接室を出た。何しに行ったんだ俺…。

ツナなんて放心状態。

一番驚いたのは



叩かれてもヒバリが怒ら無かった事だな。

他のヤツなら殺されてるよな。

## コーヒータイム

ツナと山本が痛めつけられなくて良かったあ。でも怒らしちゃった。

「恭弥せんぱい。」

「…何。」

ソファーに座ってコーヒーを飲みながら怪訝そうに言った。

「怒ってますよね?」

カチャリとコヒ カップを置く姿までいつもと違う。音まで冷たく響く。

「…雨紗は僕よりあの草食動物たちが好きだよね。」

鋭い目は冷徹でもう触れさせてくれないと思った。

「違います!!先輩が雲雀恭弥が一番好きなんです!!」

先輩に嫌われたくない!私は強く目をつぶった。

ふわりと体が暖かく包まれた。

「今言っただよ。」

上から恭弥の声。私抱きしめられてるんだ。見上げると恭弥が笑ってた。

「笑ってる!!」

「悪い？僕も嬉しいと笑うんだよ。」

ちよつと照れてる顔が好き。

「嫌われたと思った…。」

「嫌わないよ。」

抱きしめられたままソファに座った。恭弥の膝に乗ってる状態になる。

「ひゃあ！この格好恥ずかしすぎますよー！」

「何で？」

「スカートがあー！」

恭弥にスカートの中見えるよ。ううん。確実に見えるよ。

「いい眺めだね。」

「わあああ！やっぱり見えてましたかあ？」

「…ボタンかけ間違えてるよ。」

プチ プチ

「ちょちよつと待ったあ！」

「これ以上おあずけは無理。」

唇に噛みつく様なキス…。ブラウスの中に手が侵入して来た。

「ひゃ…！」

「はっ…ここ気持ち良いみたいだね？」

「ひえええ！目がギラギラしてます…！」

「あれ？こんなところに黒子があるんだね。」

「わぁ！」

鎖骨をなぞられ奇声をあげてしまった。

「ここが弱いのかい？」

「ひっ…くすぐりたいよ！恭弥あのね…大好き（気を紛らわそうと必死）。」

「ワオ。僕は愛してるよ。」

手を離してくれたから咄嗟に抱き着いた。

「へえ。素直なところもあるんだ？」

「バカ。」

とりあえず仲直りして良かった。これ以上怒らせたら恐ろしいからね。

「沢田綱吉ってさ。」

「え？」

まだ何かあるの？  
私はドギマギした。

「強かったり弱かったり変だよ。パン1だし。」

「あー、私もアレ初めて見ました。」

「当たり前。他の男のパンツなんか見てたって言うたら浮気と見なすよ？」

「って！何脱ごうとしてるんですか！」

明らかにベルトをカチャカチャさせてる恭弥。

「クスッ…。たまには体育に出ようと思ったただだよ。」

私ってばかりハズいヤツじゃない？

「なんてね。僕いつも学ランのまま体育出るから雨紗の反応見たかっただけ。想像以上で1ヶ月は笑えるよ。」

「いや。笑ってませんから！」

「教室まで送る。…草壁。」

「はい！」

「って恭弥が送らないのかい！…一人で行けますから大丈夫ですって！」

「そんなに僕がいいなら仕方ないね。」

なんて嬉しそうなの？この人わざとだ。

「さ、イクよ？」

「恭弥、発音変だよ！」

「未来の為に練習だよ。みーどりたなーびくーなーみーもーりーの  
……」

ご機嫌な彼はもう止められない。



君を抱く日まで

君の前では格好良くありたいから

本当は余裕がないなんて気付かれたくないんだよね。

「恭弥？」

後ろから抱きしめる僕を見上げる雨紗。僕が黙ると心細そうな顔をする。

「何だい？」

「何考えてたの？他に可愛い子でも見つけた？」

「そうだね。」

雨紗がいきなり立ち上がろうとしたから 僕の顎に直撃した。

「あ ごめんね。」

「見つけたよ。ここにね。」

痛そうな雨紗の頭を撫でてあげる。僕？全然痛くないよ。

「そんなの変だよ。」

「毎日可愛くなる雨紗を　僕は見つけるんだよ。」

雨紗は赤面した。このまま抱きたい。欲望のまま。本能のまま。君を壊したい。

まだ君の初めては大切にしたいから。

体は触りまくってるけどね。

「恭弥…。どこ触ってんの？」

「…柔らかくてふわふわして僕より大きなトコロ。」

「っ！これ以上侵入しないで下さい！！」

「…やだ。」

僕の欲望より君を守りたい。雨紗は気付かないだろうね。

雨紗が思うよりずっと僕が君を愛してるってコト。

「いつも何で真顔なんですかあ？」

「…幸せだよ。」

キミノスベテヲ　ダケルソノヒマデ…僕は彼女に触れた後トイレに通うだろう。

イントイレ「はあ。情けないよ。ヘタレみたいだしね。」

雨紗はと言うと

「エッチってこんな感じなのかな？よく分からない。」

知識が無いから頭をかしげてましたあ！！！！

雲雀哀れ！

## ツナ吹き出し中

学校帰りの事だった。

「ツナ。エッチした事ある？」

「ぶ　　！？」

俺は何も食べても飲んでもないのに吹き出した。

「うわっ。ツナ汚い。」

「雨紗ちゃんだって前に吹き出しただろ！！しかも何で急にそんな事聞くんだよ！！??？」

恥じらいも無い雨紗ちゃんは彼女らしいっちゃらしいが俺、男なんだけど！！

「男の子の意見を聞こうって思って。」

俺一応男に入ってたあ！！！！

「雨紗ちゃん！んな事聞いたら襲われるぞ！！」

「あっはは！まっさかあ。」

むしろ自分が女の自覚無し??

「おう 梶平にツナ！」

「あ 山本。ちょうど良かった。」

「雨紗ちゃん！！だから駄目だってば！！！！」

ってか山本家反対じゃ…？

「面白そうだな。で何の話した？」

「山本はエッチした事ある？」

……。

「はははっ。なんだそれ。」

山本スルーしたあ!!

「みんな誤魔化して私をからかうのね!」

雨紗ちゃんナニキャラ??

「雨紗ちゃんはどうなんだよ?」

「分かんない。てへ。」

「...は?」「」

雨紗ちゃん本気で何がしたいの!?

「エッチがよく分かんないの。したのかな?」

「ぶわあああ!そんな目で見るなあ!!しかも質問されても!...!!」

「まあ 落ち着けツナ。教えてやろうか？」

山本いつもと違ってこえ。雨紗ちゃんも逃げろよそこは！

「へ？」

「男のアレが女のコレに入ってズッコンバツコンって感じなのな。」

「ええ！入って無いよ！！」

思わず顔がにやける山本と俺。良かった。貞操は守ってるみたい。

「俺達で教えてやろうか？な ツナ！」

「お 俺も？」

「遠慮します。」

雨紗ちゃんが走って帰って行った。

「ツナ お互い頑張ろうな！」

「わっ！うん。」

急に肩に手をかけられ驚いた。笑顔がライバルだなと俺に言っていた。

雨紗ちゃんってば刺激強すぎだよ！！！！



嵐のようにやって来た

「イタリアから留学して来た転入生の獄寺隼人君だ。」

《ちょ… かつこよくない？》

《帰国子女よ！》

その男は嵐のごとくやって来た。

髪… 灰色だあ。ツナ早速目えつけられてるし。

ツナの机を蹴る転入生に少しイラついた。

ガタン

「ちよつとあんたいきなり失礼じゃないの？」

「あ？」

「う…。だからツナに謝ってよ！」

「雨紗ちゃんいいよ！」

ソイツの顔は影が入っているみたいで 迫力満点だった。

「梶平座れー。ホームルーム始めるぞ。」

「チッ。」

腹立つわぁ。何今の舌打ち！拒否反応スゴいんですけど。

ホームルームも終わり次の授業の準備をしていると。

「やぁ。」

「恭弥どうしたの？」

クラス中がさぁっと引いた。

「柄の悪い転入生が入って来たらしいね。雨紗が反発してないかと思ってる。」

「よく分かりますね。今いないみたい。ツナも！どうしよ。」

恭弥に引っ張られ 教室を出た。

「僕が好きなんじゃないの？」

図書室ですかあ！？先生いないし。

「あい。大好きです。でも！」

「でも？」

恭弥が一番恐いっすね。目とか？

「ツナは大事な友達なんですな。」

「あいつはそんな目で雨紗を見てないよ。」

「え？」

何言ってるの？

「君、これ以上愛想振り回さないでよ。僕にヤキモチ妬かせたいの？」

チャイムの音が虚しく響いた。めちゃくちゃな恭弥の発言がぐるぐると頭に繰り返される。

「意味分かんない。」

「雨紗？」

「私は恭弥だけのモノじゃないのー!!」

私に手を伸ばそうとした恭弥の手が止まった。

「…ふうん。僕の苦勞もしらないでよくそんな事言えるね。」

図書室の隅に迫られる。

「…こないでー!!」

「本気で言ってる？」

耳元で囁かれて 嫌でも体が反応してしまう。恭弥は噛みつくようなキスをした。

「…んっ。」

息ができないほど切ない初めての感覚。

「もっと…キスして？」

「！」

私は恭弥に抱き着いた。顔を見られたくないから。

「私の事嫌になった？」

「ワオ。愚問だね。もっと好きになったよ。」

くちゅ…くちゅ

「はっ…んっ…。」

「そんな声聞かされると僕…もう限界だよ。」

深い深いキスはあなたと私の愛の証。

みーどり たなーびく なみもりのー

「恭弥…で…ん…わ。」

「ほつとく。」

「んんっ！だ…めだよ。」

「はあ。草壁後で咬み殺す。」

ピ

「何？ふうん。僕が行くよ。」  
ピ

「草壁さん？」

「…っ！可愛いー！」  
抱きしめてくれた。

へたれこんだ私を

ん？喧嘩してた様な？まあいつか。恭弥ご機嫌だしね！

十代目！

教室に戻るとツナと転入生が仲良く？していた。

「十代目!!」

「獄寺君 その呼び方はちょっと…」

やっぱりツナの事バカにしてる。

「よう。梶平！」

「山本が珍しく起きてる。」

「ははっ！何か今日は冴えるんだよな。」

相変わらず爽やかですな。

「ツナと転校生が仲良くしてるな。俺も混ぜろ。」



「山本!？」

山本は言葉の通り二人の間に入ってた。

そして私も山本に手招きされてる。私はその輪に恐る恐る近付いた。

「こつちが梶平なのな。」

「よろしく。」

「お前俺に文句つけて来た女だな。」

ギャー! 獄寺に睨まれてる!

「雨紗ちゃんにひどい事したら怒るよ?」

「十代目: ! すみませんでしたあ!」

土下座してるし。ツナが強く見えるのは私だけ?

「何の遊びだ？面白いのな！」

「山本、多分遊びじゃないよ。」

「チツ！十代目に慣れなれしいんだよ。」

山本は笑顔で返してるし。

「雨紗。」

「恭弥！？いつからいた？」

「なに浮気してるの？」

「え？」

「違った。なに群れてるの？」

そしてチャームに助けられたのだった。

「後で応接室に来てね。」

そして素敵な誘いを断れない私。 うん。 恭弥が好きだからね。

死ぬ気で山本を助けるー！

最近野球はスランプで  
とうとう怪我までした。

「来るな！俺は生きてる意味ねーんだよ！..」

自分でも笑える。まるで一昔前の学園ドラマ。野次馬も増えて来た。

ツナが来た。

「ツナ..。止めにきたならムダだぜ。おまえなら俺の気持ちわかるはずだ。」

「あれ？教室誰もいない。」

「僕たちの為に気を効かせたんだね。」

恭弥が後ろから抱きついてきた。

「わっ！恭弥びっくりしたあ。」

「ム。ずっと一緒にいたのに。」

「だって心臓持たないよ。」

「雨紗！」

と まあいちゃついていたなら窓から何か落ちて来たんです。

「死ぬ気で山本を助ける！！」

え？ツナだった！？

「…雨紗 よそ見しないでよね。」

「ん…。」

まさかね。

教室でキスって いけない気分。

「ちょっと 恭弥どこ触ってんの？」

「…胸。」

廊下からザワザワとみんなが戻って来た。

「恭弥 みんなが戻って来たよ！」

「ふうん。」

ぱつと離れた。

チクン

何か寂しい。それに恭弥がずっと一緒にいると いない時の寂しさが前よりも倍増してる。

「雨紗…。ちゃんと黒板うつしなよ。」

「ひゃあ！」

耳元でささやかないでください。

## メッセージ

恭弥は気付かない。

全てが私の心臓を早くすること。

貴重すぎる笑顔。

拗ねた時の口元。

そして 困った顔が

大好きなの。

.....

「雨紗？こんなところで寝ちゃ駄目だよ。」

図書室の机の上で目をつぶる愛しい君。ふと日記が開いてあった。

手にとりそのページだけ読むと……。



っボン

顔が熱い。この僕が？

【恭弥が大好き。

私の事守ってくれるって言って ホントは恭弥が狼なところとか。

私を見つけてくれるキレイな瞳も

トンファーを構える姿

キスをするときの真剣な表情

時々見せる 不器用な笑顔

私にしか見せないで。

これからもずっと

【愛してる】

雨紗はどこまで僕を好きにさせるの？

僕は隅に書き込んだ。

【I love you, too .

僕の方が雨紗を好きだけだね。

恭弥  
】

…

「あ…寝ちゃってた。」

日記を開きっぱなしな事に気付いて慌てて閉じようとしたら何か書いてあった。

「うそ…。」

「僕は嘘付かないよ。」

「うわ!?!」

「色気のない反応だね。けど日記が可愛かったから今日のところは許すよ。」

「許すって何を!？」

「さあね。それより下校時刻すぎてるから帰るよ。」

こんな彼氏を持った私は多分幸せだよね。

## 僕のうさぎ

朝僕は雨紗の家に來ていた。ボディガードだからね。

「おはよう恭弥！遅くなってごめん！」

「…何ソレ。」

雨紗の頭にシッポが二つ揺れていた。靴をはきながら雨紗が一言。

「あ　寝癖が酷くて…。」

家を出て　僕は気付いてしまった。このシッポかなりツボだと。

「新鮮だね。学校ではとりなよ。」

「なんで!?!」

うさぎみたいで　狼に食べられそうとは言えない。

「…。」

「恭弥？やっぱりおかしいよね。」

触りたい！そのふわふわ揺れるシッポに。僕は手を伸ばしていた。

「わあ！くすぐりたいよ。」

「雨紗の髪はふわふわで気持ちいいね。」

「恭弥の髪はサラサラで キレイ。」

僕たちは髪を触りあった。

「今日だけは許してあげる。」

「え？」

「僕がボディガードだからね。」

キョトンとする雨紗に伝わらなくても 僕は守ってあげるよ。

僕の可愛いつなぎちゃん。

雨紗はゾワリと何かを感じていたらしい。

呼び出し

男の子から呼び出されたのは初めてなのになんでこんなシチュなん  
だろ。

「おい梶平。」

「はい獄寺。」

「チツ…！」

転校生の獄寺隼人に人気のない裏庭に呼び出されたと思ったたら睨ま  
れてる。

「お前がボンゴレに入るなんて認めねえからな。」

「ボンゴレってパスタの？」

「ああ？リボンさんに聞いてねえのか？」

顔面凶器がここに！

「リボンちゃんとは一度しか会ってないけど？」

私もキレぎみになる。

「雨紗ちゃん！獄寺くん！」

今度はツナが走って来た。

「十代目！」

「リボーンはまだ決まっていって言っただろ？あんまり話を大きくしないでほしいな。」

「はい。」

獄寺ってツナが好きなのかな。

「そろそろ恭弥のそこ行っていいいかな？」



「いいよ。ごめんね雨紗ちゃ…ってヒバリさん！？」

どこからともなく現れた私の彼氏。

「ねえ。何勝手に人の彼女と群れてるの？」

「ぎゃー！違うんです！」

「…十代目行きましょう！」

ツナと獄寺は走って行った。

「浮気と見なすよ。」

「どこまでヤキモチ焼きなの！？」

「赤ん坊が教えてくれたんだ。雨紗が獄寺隼人とキスしてるって。」

「嘘だから！」

「……………うん。」

「その間は何なの!？」

「大好きだよん。」

「心で言わないで!」

――波乱ありそうな予感。

## 最強の赤ん坊

獄寺に目をつけられた。なぜなら、授業中に山本と私を代わる代わる睨んでますから！いや、よく疲れないよね。ある意味尊敬するよ。

「雨紗ちゃんごめんね。」

「ツナが謝る事ないよ。なんかあの顔見ると面白くなって来たし。」

ツナと私は授業中にも関わらずこんな話をしていたので、先生に注意された。

…

私も恭弥と関わってかなり日常が変わったけど、私よりツナがどんどん変わってる気がする。

なんかパンーになったツナは最強で、正直ついてけない。

「ちゃおっす！」

「りぼんちゃん！？学校来たら駄目だよ？」

「俺はツナの家庭教師のリボーンだぞ。」

なるほど。だから最近ツナがたくましく…ってなんでやねーん！信じられるか！

「お前ふざけてるのか？」

カチャ…

またまた額に拳銃が！

「やあ赤ん坊。」

「ヒバリ。」

「今日こそ勝負しようか。」

シャキーン

素晴らしきかなトンファー！

まさかのまさか、リボンちゃんにふりかざした！がリボンちゃんは受け止めたあ。

これ『神業的日本人』に送れるよ？テレビ出演してリボンちゃんヒーローになれるよ。

「って二人とも消えた！？」

「リボン！あんなところで何やってるんだー！」

隣にツナがいて、向かいの屋上を指差しながら叫び出した。その先には恭弥とリボンちゃんが戦う姿。私はクラクラしてきた。

ドサッ…

私夢を見てるんだ。そうだよ。あんな赤ちゃんが戦えるはずないよね。

目を覚ましたら保健室で、オジさんがいた。

「雨紗ちゃん大丈夫？」

「うわぁ！」

何故か突進してくるオジさん。

「シャル！」

ツナの声がした方を見た。

「あれ？私倒れたの？」

「隣でいきなり倒れたからビックリしたよ！それよりヒバリさんが！」

と隣を指差すツナ。隣のベッドにはボロボロになった恭弥がいた。

「恭弥！？誰がこんな事を！」

「君たちうるさいよ。これ以上群れたら…ゴホッ、咬みゴロず…！」

そこへ小さなパラシュートから降りてきたリボンちゃんが再登場！

「俺だぞ。」

「え？」

「俺がヒバリを半殺しにした。」

「ツナ…これ夢？」

「俺も夢であつて欲しいけど残念ながら現実だよ。」

こうして最強の赤ちゃんリボンの正体を目にした。

「てか、恭弥！強くなつてよ！」

「グハッ…当たり前でしょ。次は僕が勝つよ。」

「雨紗ちゃん！自分の彼氏に何無理させてんのー！？」

ツナと私はシャマル先生に追い出された。

：

「あれ？お前男？」

「何？」

「いや、キレイな顔してっから女かと思っただぜ。」

恭弥は後ずさりした。



## ランボさん

朝、教室に入るとすぐ違和感を感じた。なぜなら花がツナに必死に話しかけているから。

「おはよ。花ってばどうしたの？」

「沢田の知り合いにめちゃくちゃタイプの男がいたのよ！」

「俺もたまにしか会わないってば。」

「花のタイプとか初めて聞いたし、見てみたいなあ。」

「だよねえ。私も見たいなあ。」

と京子はニコニコ聞いていた。さすがマドンナって感じの可愛い笑顔。

「京子ちゃんまで……。」

ツナは何やら考えてる感じだった。

「ランボさん登場！」

牛の着ぐるみを着た赤ちゃんが教室に入ってきた。

「わー！かわいい！」

と言う京子に対し、花は体をかいていた。

「花？」

「私がキアレルギーなのよね。」

「ランボ！何してんだよ！」

ランボちゃんって言うんだ。

「ランボさんリボーンを探しに来たらここに着いただけだもんね！」

「いいから帰れよ！」

「げ、アホ牛お前が来る場所じゃねえんだよ！」

「あはは！まあいいじゃねえか。」

獄寺と山本も近付いて来た。

「ツナ、そろそろ先生来ちゃうよ？」

「ちょっとランボを校門まで連れてって来るよ。」

「十代目！アホ牛の事なら俺に任せて下さい！」

その場の空気が凍った。獄寺には無理だと全員の心が一致したからだ。

「いいもんね。ランボさんには十年バズーカがあるんだもんね。」

相手にされないランボさんはいじけだした。

「ランボー！」

その時はまだツナが必死で隠そうとしていた何かに気付かずにいた。

ランボさんはツナに抱えられ、学校を後にした。

「あー、まだ痒い！」

「花、保健室行こう？」

「さすが京子は優しいね。」

ランボさんの頭の角が密かにツボだったけど誰にも言わないでおい  
た。

「アホ牛のヤロー、十代目にお手数かけやがって！」

「獄寺が行けば良かったのな。」

「…うるせえ野球バカ！」

獄寺のあだ名凄いな。

「何ジロジロ見てんだよ！ウサギ！」

「ウサギって言わないでよ！地獄デラ！」

「チツ！可愛くねえ女！」

先生が来たのに気付かないくらい獄寺と私は口喧嘩をしていた。

ツナはその隙に教室に戻って席に着いてたから良かったけどね。

ランボさんともっとしゃべりたかったなあ。

## 超絶美女ピアンキ

恭弥は私より学校が好きらしいから私はツナと山本と獄寺と花と京子と帰る事にした。

「雨紗、機嫌悪いわね。」

花に凶星を言われ苦笑いした。

「恭弥に『遅くなるから帰ってて』って言われたんだよ!」

「へえ。先輩優しいんだね。」

ニコニコ笑う京子。ツナたちは前を歩いてる。

「十代目ここは俺が!」

「いって獄寺くん。」

「やべ！俺忘れモンしたから学校戻るな！」

山本が学校に戻ってった。私も後を追う。

「私も忘れた！」

なんて言いながら。

それにしても山本速い。速すぎる！

向かいからチャリにイカすメットを被ったお姉さんが走って来た。

チリンチリーン

「あなた隼人の知り合い？」

ふさあ…

ヘルメットを取ると美女が現れた。サラサラした髪に少しキツめの綺麗な顔。スタイル抜群だし、もうパーフェクト！

「獄寺ですか？すぐ先にいると思います。あの、私は雨紗です！あなたは？」

「ウフフ…可愛い。私はビアンキよ。ありがとう。」

美人がすると何でもカッコイイなあ。  
と、私学校に戻るんだった。

山本見えなくなっただし。学校行っても恭弥に怒られるだけだよね。

「どうしよう。」

「雨紗は僕の言う事聞かないよね。」

「ん？」

振り向けば恭弥がいた。

「ねえ、そこまでして僕にかまって欲しいのかい？」

「彼女なら当たり前でしょ？」

「ワオ。そこまで送るよ。」



私たちは手を繋いだら恭弥の手は少し熱くて冷え性の私にはちょうど良かった。

「思ったより握力強いね。」

「ごめん。緊張して…。」

「僕はキスしていい？なんて聞かない。」

「え？恭弥、耳真っ赤だよ!？」

「うるさい。」

初めて手を繋いだら心も近付けた気がした。

そんな帰り道。

## リボーンの間

遅刻魔だった私は恭弥の迎えにより強制的に遅刻はなくなった。

カサッ…

靴箱に紙切れ発見！が、どう見てもラブレターには見えない。ガツカリしながら開いた。

【二時間目の休み時間に屋上に来い】

という命令口調な内容。三時間目が体育でなければ行こうと軽く考えた。

二時間目は化学室に移動しなければならない。が、おかげで屋上まで近くなった。

「はあーあ。」

「うぜーため息ついてんじゃねえ！」

「わ…！なんで獄寺までついてくんの？」

「十代目の靴箱に入ってやがった。」

二時間目の休み時間、獄寺と私は階段をのぼっていた。

「って、ツナの靴箱の中チェックしてんの？」

ガチャ…

獄寺は私をシカトして屋上に入った。

「誰もいねーぞ。」

「え？獄寺…上！」

上から天使が舞い降りて来た。

「お前は呼んだ覚えねえぞ。ツナを呼んで来い！」

「リ…リボンさん！？」

獄寺は屋上を後にした。

「リボンちゃんどうし…え？」

私は縄で体をくくりつけられていた。

「この上に立つとけ。」

「え！？落ちますけどー！！」

際どいところに立たされた私。

ガチャ…

「ワオ。赤ん坊どういっつもりだい？」

「恭弥！助けて！」

「ヒバリに彼女なんておかしい話だ。他人を草食動物としか見ないお前はどこに行った？」

「言いたい事はそれだけかい？」

シャキーン

トンファー登場！

開きっぱなしのドアからツナと山本と獄寺が来た。

「リボーン！何してんだよ！」

「ヒバリを覚醒させようとしてる。ダメツナも手伝え。」

「とつくに覚醒してるしー！？」

ヒバリの目はギラついていた。

「ちょっと恭弥！戦う前に私を助けてよ！」

「雨紗は高いところが好きだね。すぐ終わるから動かないでね。」

「ツナでもいいから助けて！」

ズガン！

ツナは後悔した。もっと自分が強ければこの状況をどうにかできたのに！と。

「死ぬ気でヒバリを止める！！」

ツナはヒバリの前に立ちはだかった。

「またギャグかい？」

レオンがハリセンに変わった。

「うおおおお！」

ベシッ

ヒバリの頭をハリセンで叩いた！

「我が侬言つな！」

「ふうん？…死ね。」

いくら死ぬ気モードでもハリセンはすぐにボロボロになった。そしてツナは元に戻っていた。

「わあああ！助け…ふぎゃ！」

その間に山本が雨紗を助けていた。獄寺は…ツナの近くに寄っていた。

「十代目！大丈夫ですか？」

「獄寺君も助けてよ。」

「俺が止めたんだぞ。じゃあな。」

リボーンはパラシュートで飛んでった。

「まだ僕の前で群れるつもり？」

ギラン！  
ヒバリ覚醒…。

「雨紗はここだよ。」

隣を指差す恭弥。

「恭弥なんか大嫌い！」

戦いを優先させた恭弥は雨紗に逃げられていた。

階段にて。

「雨紗ちゃん戻った方がいいんじゃない？」

「暴力的でもヒバリは彼氏なのな！」

「チツ…。ヒバリはアホウサギの彼氏なんだろうが。」

「…やだ。」

雨紗は戦闘オタクな彼氏をしばらく許さない事にした。



## 荒れ狂う雲

ガキン…ガッ！ゲチヨッ…

今日も無駄に群れる連中が雲雀恭弥に咬み殺されていた。

「草壁。分かってるよね。」

「はい！」

そしてまた救急車が並盛中に訪れる事になる。

「反抗したのが悪いんじゃない。ヒバリの前で群れるから悪いんだ。」

後始末を手伝う風紀委員が必ず呟く言葉だ。

…

ツナ達は廊下を走っていた。

「次体育なの忘れてのんびりトイレ行っちゃった。」

「十代目！俺がお手伝いします！」

「獄寺…意味が違ってくるのな。」

三人はが曲がり角に突っ走っていると、ツナが誰かに当たった。

「いたっ！」

ツナだけがコケた。

「やあ。君たちまさか群れてる上に授業をサボる気かい？」

「ヒバリ！」

「まあまあ、俺たちなら間に合っつて！なあツナ？」

ツナは立ち上がりながらこう思った。

山本…俺に話をふらないでよー！と。

「へえ。廊下も走ってたよね。そこまでして僕に咬み殺されたい？」

俺達は息を飲んだ。

「そもそも僕の雨紗と仲が良すぎ。」

まだ喧嘩中だったのー！てか、とんだとばっちりー！？

「十代目は俺が守る！」

「駄目だよ獄寺くん！」

「機嫌悪いのは分かるけど、八つ当たりは良くないのな。」

山本スマイル来た！

「じゃあ今すぐ雨紗をつれて来てよ。」

キンコン…  
チャイムが鳴った。

「けど授業始まりましたよ。」

「で？」

パシリに使われたことよりヒバリの『で？』の目がショックだったツナであった。

「雨紗ちゃん！ヒバリさんが呼んでるよ！」

「…で？」

「アホウサギ！早く行きやがれ！」

「私今走ってるの。見て分かんない？」

「俺達の命が危ないから頼む！この通り！」

山本のお願いポーズが決まったあ！

「…少なくとも今は不味いんじゃない？」

女子の中に紛れ込み、京子ちゃんにクスクス笑われたツナだった。

## 喧嘩するほどナントヤラ

ヒバリさんは荒れていた。

「どうしてくれるの？リボーンのせいだよ！」

リボーンがいつものように学校でツナを観察していたら、ツナから近づいて来た。

「あれが本来のヒバリだ。ウサギと付き合って頭がおかしくなってたんだぞ。」

「えー！？今の方が頭おかしいよ絶対！！！」

「十代目大変です！」

「どうしたの獄寺くん？」

ゴクデラが走って来た。何やらパーティの予感だぞ。

「ヒバリとアホウサギが！」

…

その頃の一年の廊下。

「へえ？フライパンとは君らしいねえ。」

「恭弥と戦うには防御が必要だからね。」

フライパンと言う事は…。野次馬たちは一斉に自分の耳をふさいだ。

ガキーン！ガギャ…ガギーン！

「へえ？凄い不協和音。まるで今の僕たちのようだね。」

「頭が痛い。恭弥は大丈夫なの？」

ふと恭弥の耳を見ると耳せん発見。

ガギーン！

「よく受け止められるね。さすが僕の彼女。」

「恭弥だって…。本気じゃないの分かってるんだから。」

そこへツナが走って来た。

「ヒバリさん！」

「ワオ。強いのか強くないのか分からない沢田綱吉。」

「ツナ？」

穏やかな二人の空気を読んだツナは…教室に入り席についた。

「二人ともよそでイチャつけよな！」

山本にしか言えないセリフだった。



こうしてリボーンの思惑は崩れ去り、また恭弥と雨紗はラブラブになりました。

おしまい。

「まだまだ終わんねえぞ。」

リボーンは終わらせたくないらしい。

もちろん

つづく！

## 笹川兄妹

「どうしよう!」

京子が可愛く困っていた。

「またお兄さん?」

「うん。お兄ちゃん最近怪我が多いの。」

花と京子の会話を聞きながらオレンジジュースを飲んでいた。

「雨紗ちゃんはどう思う?」

「うーん。お兄さんの事だから銭湯の煙突にでも登ったんじゃない?」

「あのお兄さんならあり得そうだけど、いくらなんでも無いわよ。」

京子は悩んでいるようだった。

私はツナに聞いてみる事にした。

「え!?!」

「その反応だと知ってるんだね。」

「リボーンが京子ちゃんのお兄さんも仲間に入れたらしいんだよ。」

「うそ! 大変じゃない!」

「そこの二人うるさいぞ!」

授業中の雑談は控えよう。

そして休み時間。

「アホウサギ!」

「うわっ！何よ地獄デラ！」

「授業中、十代目に話しかけやがって！迷惑なさってるの分かんねえのか！？」

「そっか。ツナごめんね。」

ツナに謝るとツナは苦笑いした。

「いいよ。当てられても怒られるだけだし、どっちにしろ同じだよ。」

ツナのネガティブシンキング炸裂。

「ツナが間違っるのは獄寺がよく分からないジェスチャーするせいなのな。」

「なんだと！正解も分かんねえ野球バカに言われたくねえ！！」

「あはは……。首が苦しいのな。」

山本やバくない？

「それより雨紗ちゃん！お兄さんに会いに行こう！」

「いいの？山本大丈夫？」

「いいから行こう！」

ツナはたくましくなった。捕まれた腕が力強く感じる。少し前までは私が引つ張ってたのに、男の子の成長って凄いな。けど、ちょっと寂しかったりする。

「いた！京子ちゃんのお兄さん！」

「おう！沢田ではないか！」

「パオーン。」

一緒に知らない老人がいる。

「リボン何してんの!？」

「へ?リボンちゃんどこにいる？」

「パオパオ老師は凄いだぞ！」

パオパオ老師に鍛えられてるらしいお兄さん。

「お兄ちゃん！」

京子が走って来た。お兄さんは怪我を隠していた。

「お兄ちゃんまた怪我が増えてる！」

「さっき階段で転んだのだ。」

「滑りやすくなってるから気をつけてね？」

「心配するな！」

二人のやり取りを見てるツナがハラハラしてる。

「ほんと仲が良い兄妹だね。」

「京子ちゃんのお兄さんは嘘が下手すぎるよ。」

パオパオ老師はいつの間にか消えていた。

…

応接室。

「やあ、赤ん坊。」

「ヒバリは一人が似合ってるぞ。」

「それより覚悟はいいかい？」

シャキーン！

一段とトンファーが光っていた。

## 噂の二人

「最近、ヒバリと梶平がツルんでんの見ないのな。」

山本の発言からこの話題は始まった。

「野球馬鹿！便所でする話じゃねえだろ！」

「けど、確かに俺も見えてないよ。」

トイレを出てからもこの話は続いた。

「気になるなら野球馬鹿が自分で聞きやがれ。」

「チャンスなら嬉しいって思ったただけだぜ。な？ツナ！」

「え？俺は…。」

最近京子ちゃんが可愛くみえてしまつ。



「さすがダメツナ。最低だな。」

「リボーン！」

リボーンは俺の心と呼んだらしい。

「お前が自分で調べる！」

ズガン！

俺は死ぬ気弾を撃たれ後悔した。

雨紗ちゃんを好きか、もう一度話せばよかったと。

「うおおお！」

「十代目！？」

「ツナ！」

雨紗ちゃんめがけて走った。

「あれ？ツナ？」

「梶平雨紗さん！俺と話しをして下さい！」

雨紗ちゃんは笑顔でこう答えた。

「いいよ。」

元に戻っても俺は思った。やっぱり雨紗ちゃんは優しいんだね。

「雨紗。」

「あ、恭弥！もういいの？」

「ん。行くよ。」

俺から見てもヒバリさんと雨紗ちゃんはお似合いだった。

ディーノさん

帰り道、少し前を歩く恭弥がトンファーを構えた。

「どうしたの？」

「ワオ。草食動物の群れだよ。」

めちやくちゃ嬉しそうなんですけど！

そこにはスーツを着たその道の人たちが集まっている。しかもその家はツナの家だった。

「ツナの家だよ！」

「やあ。赤ん坊。」

「コイツはディーノだ。」

玄関から出て来たのは白馬が似合いそうな外国人の美少年だった。

キラキラしてる！

「あれ？ヒバリさんに雨紗ちゃんまで！」

ツナが後ろから出て来た。それより、このディーノさんて人日本語しゃべれるのかな？

「お前もツナのファミリーのヤツか？」

日本語ペラペラだし！

「ファミリー？僕は群れるつもりはないよ。」

「また来るなツナ！」

恭弥を完全にシカトしたー！

ツナもびっくりしてる。

「ちょっとディーノさん！」

「ん？なんだツナ？」

恭弥がトンファーを振りかざした！

シュルル！

ディーノさんはムチでトンファーをつかんだ。

「今日は時間ねえからまたな。」

《ガハハ！相手してやれよボス！》

「うるせー！」

「ねえ。僕から逃げられると思ってるのかい？」

「ん？そつがつつくなよ。」

ディーノさんと恭弥はしばらく睨み合った。

「ツナ。」

「二人が暴れたらどうしよう!」

「ディーノさんの顔の傷どうしたの?」

「あー。」

ツナの話によるとディーノさんは部下の前ではめっちゃ強いが、部下がいないとコケたり滑ったりと大変らしい。

ディーノさんを見る恭弥が楽しそうで少し面白くない帰り道だった。

## 確かめたいこと

十代目！十代目！と言う獄寺を見ると有らぬ方へイメージしてしまう。

「雨紗も行かない？」

「へ？」

「みんなでツナくんちに行くの。」

京子の誘いを断るはずもない私は一緒に行く事にした。

前に獄寺とツナと山本が歩いている。

「ささ、十代目お先にどうぞ！」

「獄寺くん、やめてっば！」

「うわぁー！何を許すの！ねえ！獄寺説明してよー！」

獄寺の胸ぐらを掴んだ私の手を獄寺がさらに掴んで払った。

「ああ？ウサギには関係ねえだろ。」

「獄寺を見てると最近眠れないのよ！」

まさか本気でラブな意味でツナを好きなのでは？と考えると眠れない。

「梶平。獄寺が好きになったのか？」

今度はその払われた手を山本に掴まれた。

「違うよ！私が好きなのは恭弥だけだから！」

「獄寺より俺を見て欲しいのな。」

ニコニコと手を離れた山本。ツナはハラハラしてる。

「京子に沢田、早く行くわよ。」



「花ちゃん!？」

そしてツナと京子と花は先に行った。

「十代目え!!」

「獄寺とツナの事なら大丈夫なのな。」

「山本が言うなら違うんだね。」

「このアホウサギ!」

「アホでもウサギでもないですう。山本行こう!」

恭弥と帰る事をすっかり忘れていたのですた。

もう二年だね！

あっという間に2年生になった。

私はすれ違う度気になるヤツらがいた。みんな気にしないとが無  
い普通。

「うそー！オレ留年ー！！？」

花と京子と同じクラスって喜んでたら、ツナが叫んでるのが聞こえ  
た。

「ツナまじでないの？」

「雨紗ちゃんどうしよ俺…、何だ？あのすごいデコレーションはま  
さか！」

ぐつとバラのデコレーションをはいだツナ。

「あつた隠れてた！！そーだ京子ちゃんは！！？」

「ぶ。ツナ分かりやすいね。」

山本と獄寺も同じでツナは喜んでた。あ、私も嬉しいからね。

「雨紗ちゃんは内藤ロンシャンって知ってる？」

「デコってたヤツでしょ？いやいや、前から目立ってたよアイツ。」

と、胴上げしてる連中をツナが凝視してる。

「あ、沢田ちゃん！」

「ツナ呼ばれてるよ。」

私は逃げようとしたけど、ツナに腕を掴まれた。

「はいはい！沢田ちゃん！同じクラスになったのも何かの縁だね！お互いガンバローよ！」

「え。や…やつぱ、オ…オレ？」

「そーだよボンゴレ十代目！」

「んなー！？」

掴まれた手を払おうとしたら、内藤ロンシャンに話しかけられた。

「隣のキミはヒバリ風紀委員長の恋人！ひょっとして沢田ちゃんと三角関係とか！？」

「あー私はただの梶平です。」

「タダノちゃん！？つかー！人違い？」

すれ違ったイメージそのままコイツ。そこに山本と獄寺が近寄って来た。

「おはようございます十代目！2年も同じクラスっすね！野球バカとアホウサギも同じなのが残念すけど。」

「こら、獄寺。よ！梶平も同じとは運命だな！」

「今それどころじゃないの。」

内藤ロンシャンとのファーストコンタクトはここから始まった。

中途半端に終わり、明日に続く。

「書いてるヤツ、舐めてるぞ。」

リボーンにボロボロにされ、反省した作者でした。

その基準やめて？

「なんなんだ？あのアホウサギより下回るくらい変なヤツらは。」

「あはは！確かに梶平よりは面白くねえな。」

やっと内藤ロンシャンが把握されたのは喜ばしいが。

「何その私が変態の基準みたいな！」

「あー。雨紗ちゃんパンツ見せて歩いてるからね。」

「ツナ、フォローする気ないならやめてよ。」

ロンシャンに一通り振り回された私たちは学校から帰っていた。

「おい、アホウサギ！ヒバリはいいのかよ。」

「しまった。また忘れて来たあ！」

私は頭を抱えた。

「あのヒバリさんを忘れ者みたいな言い方できるの雨紗ちゃんだけだよ。」

「ようやくヒバリと別れる気になったのな？」

「その山本ジョーク全く笑えないんだけど。」

よくよく考えると男子に囲まれちゃってる私。獄寺と山本はファンクラブがあるほど人気者で、ツナはイジられキャラ。

逆ハーではないですか？

「梶平？」

「あ、待って！」

「またてめーは！アホウサギなんか置いてけばいいんだよ！」

「獄寺くん。雨紗ちゃんをいじめたら許さないよ。」

「はっ、はい！十代目がそうおっしゃるなら！」

ああ、なんて素敵なお景なの。

そこはちょうど十字路だった。

「やあ。」

まっすぐ歩いていると左から恭弥が現れた。

「ヒバリさん！」

「ヒバリは（忘れた）ペンケースと同じレベルらしいのな。」

「野球バカ！こんな時に何言ってるんだ！」

私はその隙に軽くバックして方向転換した。

ガシリ

次の瞬間手を掴まれた。



「ペンケースと一緒にだって。笑えるよね。」

「目が笑ってませんからあ！」

「僕たちの愛の巣（学校）に戻るよ。」

「愛の巣で学校とは言いませんからー!!」

と引きずられる雨紗を見て獄寺がこう言ってた。

「やっぱりあのアホウサギが一番変わってやがる。」

山本とツナは頷いたとか。

## 風紀委員長の小指

ズリズリと恭弥に引きずられる私。

「恭弥ってば！逃げないから離して？」

「ワオ。最近はめつきり顔を出さないよね。草食動物と群れてるからだって知ってるよ。」

「それは同じクラスだから自然な成り行きで。」

「へえ。僕も2年A組で授業を受けようかな。」

恭弥は学年を自由自在に操れるのです。

そんな話をしたら応接室に着いた。結局引っ張られて来ちゃったけど。

「腕が痛いよ！」

「あれ？手を繋いでたつもりだったんだけど。」

「はっ！確かに手を握られてた気がする。」

「そこでうるうるされたら目障りだ。座りなよ。」

「私彼女ですよね！？」

恭弥は黒塗りソファに座った。私もその隣に座る。

カリカリ…

カリカリカリカリ…

どんな資料なんだろ。

私は恭弥の資料をちらつと見てみた。

【並盛の払われていないシャバ代リスト】

目を疑うとはこの事だ。

「恭弥ってシャバ代までもらってんの？」

「ああ、これはこの間の祭の時だよ。」

「へえ。」

よく分からないけど敵に回したくない。

「よし終わった。草壁。」

ガラ

「はい。」

「後は出来るよね。」

「はい！」

ピシャン

「恭弥ってさ、ボス？」

「クッスッ……。風紀委員長で雨紗の彼氏なんじゃない？」

このクールな眼差しは恭弥にしかできないと思う。

私は一人喜んでたいた。

## 鬼ごっこ

「ばあー！ブロッコリーのオバケだじょー！」

本屋さんに行った帰り道、牛柄の服を着た赤ちゃんと一つにミッアミした赤ちゃんが追いかけてっこしてるのを見た。

「あー！キミ、リンボくん！」

「んー？俺っちリンボさんだもんね！リンボは誰だい？」

もう一人の赤ちゃんは中国語をしゃべっててよく分からないけど、リンボの話でイーピンちゃんと判明した。

「お前もまざるか？」

「私は雨紗お姉さんだよ。」

「ウサギー？ウサギが鬼ー！」

これにより壮絶な鬼ごっこが始まった。

「てか、二人ともチョコマカチョコマカすばしっこすぎ。」

「ウサギ年取ってるから遅いんだー？」

「塀の上は無し！」

「えー？」

イーピンちゃんは降りてきてくれたけど、ランボは鼻ピーをホジホジして降りる気無し。

「イーピンちゃん待てー！」

が。追いつかない。

しかも、イーピンちゃんは適度に待ってくれてるのにつかまえられないもどかしさ。

「ランボさんお腹へったー。先帰る。」

興味を無くしたランボは帰ってった。

「イーピンちゃんも帰っていいよ?」

たち。

イーピンちゃんは私の手にタッチしてくれた。

なんて良い子なの!

「ランボって子から言い出したはずだね。ま、いつか。」

気が付けば辺りは真っ暗でした。



## 苦手な人

私は走っていた。

なぜ？パイナップルヘアの男が追いかけてくるから！

：

それは二時間前だった。

「クフ…。」

本屋（行きすぎ？梶平の好きなスポットなんです。）で立ち読みしていた私。隣で雑誌を読む男が一人で笑い出したから私はちらっとその男を見た。

「クフフ…。」

なかなかの美少年だけど、笑い方とパイナップル的な髪型で台無し。ゆえに、その変人と目が合った。

「ど…どうも。」

「ひょっとして逆ナンですか？」

ちーん。

「さようなら。」

私は笑顔で本屋から出た。あの制服見た事ある。他校に興味ないから忘れたけどね。

「ちよつとそこの、僕に逆男した人！」

なぜかパイナップルのヘアの人が追いかけて来た。

小走りだったのがだんだんと全力疾走になる私。

「なんで逃げるんですか！」

「追いかけるからですよ！」

知らない人に追いかけられたのは初めてだった。

ガッ

そこに段差が。

私は顔からコケた。

「いったあ…。」

「大丈夫ですか？逆ナン娘。」

「大丈夫に見える？鼻血出たし。痛いに決まってんじゃない！」

「クフフ…。」

ダメだ。もう関わらないであろうこの男が苦手すぎる。

「そうだ。手当てしてあげますよ。」

「え？」

「どうぞこちらへ。」

どうなる雨紗。

恭弥が助けに来るのか？

次につづく。

## 学ランの香り

「僕は六道骸です。」

その六道骸にがっしり掴まれた腕。繊細な美少年な風貌なのに、この握力何？手がビクともしないし、ほどけない。

「どうしました？自分の名前も言えませんか？」

もう少しで並盛から出てしまう。恭弥に助けて貰えなくなるよ。

「ねえ。」

空耳が聞こえた。

「僕の彼女をどこにつれてくつもり？」

ヒュッと六道骸めがけてトンファーが振りかざされた。

「クフフ…。今日はここまでにしておきます。それでは…。」

トンファーは避けられ、六道骸は隣町に歩いてった。

恭弥を見ると、ムスツとしていた。

「恭弥…ありがとう。」

グイツと掴まれた手を持ち上げられた。

「アイツ…許さない。」

掴まれた手首に青い痣が出来ていた。恭弥は草壁に氷を買ってこさせた。

「このへんは危ないって言ったよね。」

「…うめん。」

「はあ。」

ふさりと、学ランを肩にかけてくれた。

「怖かったね。」

私はふるえてたみたいだ。そして優しく抱きしめてくれた。

前からも後ろからも恭弥の匂いがした。

「草壁遅い。」

「あはは。これくらい大丈夫だよ。」

「ねえ。自分が泣きそうな顔してるって知らないでしょ。」

恭弥は彼氏なんだ。

こんな時に気付けた。

## マジな気持ち

好きだ。

好きなんだ。

けど、そんな熱い気持ちを他の奴らには見せたくないのな。それが俺のプライドだから。

「山本。ボーっとしてどうしたの?」

ツナが俺の顔を覗き込んで来た。相変わらず可愛いのな。あ、ソッチの趣味ないから。

てか、獄寺に睨まれてるのな。まあ、いつもの事なのな。

「好きな娘の事を考えてただけなのな。」

「好きな娘って雨紗ちゃんだよな。」



「アホウサギを好きだあ！？」

教室に響き渡る声にさすがの俺も獄寺の口を手でふさいだ。

「むじむじー！」

「今のは冗談なのな！」

幸い梶平は教室にはいなかった。

「けどさ、もう諦めた方がいんじゃない？いくら山本でもヒバリさんには勝てないよ。」

「ぶはっ！てめえコロス！」

「勝てないとか考えてたら恋なんてできないのな。」

ツナと獄寺が真っ赤になってたけど、俺は俺のペースがある。

けど、窓からあの二人を見るたびに胸が痛むのはちょっと勘弁して欲しいのな。



## 目の錯覚

あのクソウサギ。ヒバリの彼女だか何だか知んねえが十代目に近すぎんだよ！

「そんな睨まれると不愉快なんだけど。」

「ああ？お前しゃべり方までヒバリに似てきやがったな！」

「そ…かな。」

いや、今のぜってえ顔赤くするとこじゃねえだろ。

「ちっ…。とにかく十代目には近付くな。」

「話飛びすぎててよく分からないんだけど。」

「だか…。」

あれ？コイツこんなにまつ毛長かったか？

一緒アホウサギが可愛く見えた。

目を擦ってからもう一度見ると普段のアホウサギだった。

「獄寺？」

「ちっ…アホウサギはまつ毛だけは標準並みだな！」

獄寺にとって最大級の褒め言葉だったが、雨紗には通じなかった。

「それ以外はブスって意味？地獄寺ってデリカシーの欠片もないんだね！」

アホウサギは走ってった。

ちなみにこれはとある帰り道の話。

## ヒバリの不満

最近、雨紗を探すと必ず沢田綱吉と山本武と獄寺…えーと、隼人だっけ。ソイツらがいる。

男っただけでも面白くないのにあの三人を今すぐ咬み殺したいよ。

「ひっ！ヒバリさん！？」

並盛町をフラフラ歩いてたら、横にある家から沢田綱吉が出て来た。

「やあ。ちょうど咬み殺したいと思ってたんだ。」

「え？俺を！？群れてないじゃないですか！？」

「僕には関係ないよ。」

シャキーン

トンファーが太陽に反射して光った。

「十代目！ここは俺がなんとかします。早くソイツをなんとかして下さい！」

「邪魔するな。獄寺隼人。」

機嫌が悪いと口が悪くなるのはよくない。僕なら有りらしいけどね。

「ツナは今忙しいんだぞ。」

「赤ん坊。またキミに会えるなんて嬉しいよ。」

「ヒバリは俺が殺る。獄寺も行け。」

「リボンさん！ありがとうございます！」

何を急いでるんだろう。ちょっと興味がある。

「ボンゴレファミリーの大事な時なんだ。ヒバリも仲間に入るか？」

「クスッ…。僕は誰とも群れる気はないよ。」

「雨紗とは群れてないのか？」

「ああ、群れるとかじゃなくてもう体の一部…とまでは言わない。」

だんだんとキザなセリフを言う自分がバカバカしくなっごまかし  
たら赤ん坊はニヒルに笑った。

「じゃ、俺も野暮用があるからもう行くぞ。」

「次はキミと戦いたいよ赤ん坊。」

こんな時雨紗がいれば慌てるんだろうけど、僕は僕のペースを崩し  
たくない。

それが雲雀恭弥なんだ。

## 美形な姉と弟

私は知らなかった。ビアンキさんと獄寺が義兄弟だったなんて。

「そんなに驚くことかな。」

「ツナも驚いていたぞ。」

おつかいの帰りツナとリボーンちゃんと会ったから話をしているとこんな話になった。

「あ、噂をすれば獄寺くん。」

「十代目！偶然っすね！」

「ここはツナの近所だよ。わざわざ会いに来たんでしょ？」

「アホウサギは黙っとけ。」

ビアンキさんがお姉さんとかうらやましいなあ。



「リボン。」

そこへビアンキさんが歩いて来た。

「グハア！」

「え？獄寺！？」

「あら雨紗も一緒なのね。気にしないで。隼人は私を異性として気にしすぎて照れてるだけなのよ。」

私が納得しているとツナが「違うよ！」と言い出した。

「獄寺くんはビアンキを見ると発作が出るんだ。早く部屋で休ませないと。」

「私も手伝うよ。」

獄寺は軽いからすぐツナんちに運べた。

「は！」

5分後に獄寺は目覚めた。

「ビアンキさんの美貌は破壊的だからしょうがないね。」

「ここは十代目のお部屋！？十代目すみません！」

「いいよ慣れてるし。」

私の存在を無視した獄寺。

「あ、雨紗ちゃんも運ぶの手伝ってくれたんだよ。」

「アホウサギが？…たまには良いこともすんじゃないか（ねえか（ありがとな））。」

「獄寺を次は放置しようねツナ！」

「え？」

獄寺は心の中でしかありがとうと言えない事にまたまた気付かない  
雨紗であった。

まだ知らない

人は知り合う前にすれ違う事がある。

例えば…。

『うわぁ…あの人すごい髪型だなぁ。』

ツナの場合、六道骸とすれ違っていた。

そして骸の方はツナを見てこう思っていた。

『クフフ。女の子なら可愛いのに勿体無いですね。』

何が勿体無いんだよ！と獄寺がツッコミそうだ。

まだ二人はお互いが戦う事を知らない。

「あ、貴方はいつかの逆ナンの…。」

その後に出た雨に逃げられる。

「クフフ。照れ隠しですね。」

誰よりもプラス思考だった！

## 笹川先輩

水道で水を飲んでたら、笹川先輩と目が会った。京子のお兄さんだ。

「京子の友達ではないか！」

「あ…どうも。」

「最近京子からよくお前の話を聞いているのだ！」

嬉しそうで良かった。機嫌の悪いお兄さんって怖そうだしね。

先輩短髪似合うなあ。

「私の話ですか？」

キュキュツと蛇口を閉めてからもう一度先輩を見ると、頷いていた。

「あのヒバリが認めた女だ。凄まじい身体能力の持ち主に決まっている！」

「へ？」

「どうだ？我がボクシング部に入らぬか！」

ボクシング部の事しか考えてないよこの人！

「私より恭弥の方がボクシング部に向いてますよ。」

「ヒバリには断られたのだ！」

分かりやすい性格ってうらやましい。

「お兄ちゃん何してるの？ここ2年の教室だよ！」

「京子。じゃ、返事はいつでもいいからな！」

「え。断ったんですけど。」

先輩は素晴らしいフットワークで走ってった。

「雨紗ちゃんごめんね。」

「相変わらず面白いお兄さんだね。それより、ボクシング部には入らないって伝えてもらえるかな？」

「なんだあ。返事って告白かと思っちゃった。」

ほんわかと安心する京子に癒されたのでした。



## 絡まれカップル

今日は恭弥の風紀委員の仕事も落ち着いてるらしく、家まで送ってもらえる事になった。

きゅっ…

恭弥がさりげなく手を繋いできて、私も握り返す。

「手…熱いね。」

「え…私汗かいちゃってる?」

「クスッ。悪くない熱さだよ。」

エロい！なんかエロいよ！

「おいおいおい。天下のヒバリ様も女にはデレデレってか?」

「てか、可愛くねえじゃんソイツ。」

「ギャハハ！お前が言うなし。」

ジャイアンの人とヒョロヒョロした人とニキビが目立った人の男  
三人組が近づいて来た。

恭弥はシカトして歩き出した。

「逃げんのかよ！」

「はあ…。せっかく見逃してあげようとしたのに、君たちそんなに  
咬み殺されたいのかい？」

繋いだ手が離れた。

素早くトンファアを構える恭弥。

「君たちなら足一本で十分。」

「なんだと！」

「いくぞ！」

バキヤッ、バキイ！  
グギッ

生々しい音が響く。

「弱い癖に僕に楯突くなんて。」

「恭弥……。やりすぎだよ。」

「気を失ってるだけだよ。」

また繋いだ恭弥の手は冷たくなっていた。  
あんなに動いてたのになんで？

「ちょうど良くなったでしょ？」

「え？」

「雨紗の熱い手と僕の冷たい手。」

咬み殺すのを止めてほしい。この人たちみたいに恭弥に恨みを持つ人はたくさんいるんだ。

「恭弥：。」

「なんだい？」

私は恭弥の手を強く握った。

「無理しちゃダメだよ。」

恭弥は私の手を握り返してくれた。

## 耳たぶ

「やーっぱりなのな。」

休み時間に山本が獄寺に話しかけた。

「気安く触んじゃねえ。」

ポンと肩を叩いただけなのにコレだ。俺には敵意むき出し。

「ボーっとしてる時、梶平を見てるのな。」

「は？アイツの奥の窓の景色見てんだよ！」

「体育の時も掃除の時も、梶平の後ろには窓はなかったのな。」

ガタン…

獄寺は山本の胸ぐらを掴んだ。

「言つとくがな、俺が十代目の右腕だ！」

「お前は耳たぶで良いのな。」

「んだと！」

そこへツナが走って来た。

「獄寺くん！山本！」

獄寺は俺から手を離れた。

「すいません十代目。」

「心配しなくても大丈夫だぜツナ。」

「なら良かったよ。」

それにしても獄寺は上手く話をそらしたのな。

「おい、野球バカ。」

「ん？」

すれ違いざまに獄寺はこう呟いた。

「誰にも言うんじゃないぞ。」

意識してることを認めてるってことか。

絶対耳たぶには負けないのな。

「山本どうしたの？」

「やっぱり獄寺は面白いのな。」

俺は負けず嫌いだからライバルには負けない。

睨まないで

最近気が付けば獄寺に睨まれてる。

「ちょっと獄寺！」

「何だこのアホウサギ！」

掃除中だけど我慢ならないから獄寺に文句を言う事にした。

「私が気にいらないのは分かってるから睨むのやめてくれる？」

「なっ……！」

なぜに赤面になる獄寺よ。

「雨紗。サボらないでよ。」

花に怒られて持ち場に戻った。



「バカね。」

「えー。いきなりバカにする？」

「獄寺は睨んでないわよ。目付きが悪いだけ。」

ホウキで廊下を掃きながら、花の話を聞いた。

「なんで分かるの？」

「獄寺って分かりやすいから分かっただけよ。」

「じゃあ何で見てるの？」

「それは自分で考えなさい。」

獄寺を見たら目が合った。すぐそらされて意味が分からない。

「雨紗は彼氏の事だけ考えればいいのよ。」

意味深なこと言われて気にならないわけがない。けど、気にしないことにした。

## あいらぶ学ラン

今日も朝一番に応接室に向かう。朝一緒に登校しても足りない。

ガラガラ…

「恭弥。」

「はぁ…。暑いね。」

恭弥は学ランを脱いだ。

「えー。脱いじゃうの?」

「今日は暑いからいくら僕でも着ないよ。」

「そう…。なんだ。」

じつ…と学ランを見てみると、恭弥がため息をついた。

「僕じゃなくて学ランに会いに来たのかい?」

「あ、恭弥に会いに来たんだった。」

「笑えない。」

壁に押し付けられて、唇にキスされた。

「ねえ。一着くらいあげるよ。」

「学ラン!？」

「ただし、変な事しないでよね。」

「変な事？」

首をかしげたら、呆れた顔された。

「すぐ破けるんだよね。だからスペア作っただ。」

「って…、どんだけあるの？」

応接室は不思議がいっぱい。学ランのスペアが収納されたスペースは隠れ家みたいだった。

「どれがいい？」

「…恭弥がさつき脱いだやつ。」

「雨紗のえっち。」

そんなこんなで恭弥の学ランゲットしました！

## 兎の宝物

「ふんふんふーん。」

雨紗は鏡を見ながら鼻歌を歌っていた。

「お前キモい。」

「ぎゃー！いつからいたの？」

そこにいたのは同じ年くらいの金髪の男の子。思いっきり染めましたと言う感じで生え際が少し茶色がかっていた。

「明<sup>あき</sup>ってばプリンになってるし。」

「それより、その学ランコスプレかよ。」

「その髪のがコスプレだし！」

この明と言う男は雨紗と仲が良いらしい。

「明って山本を知ってるんだっけ？」

「山本って山本武か？あいつも少年野球やってたからな。」

「だから明は挫折したのね。」

「チゲーよ！俺はビジュアル系バンドに魅せられたんだ。」

ガンガン！

窓ガラスが割れんばかりにノックされた。

「恭弥！」

ガラガラ…

「誰だい。そのチンピラ。」

「あ、コイツは喧嘩友達みたいなもんだよ。」

「チンピラだと？…このトンファーまさか、雲雀恭弥？」

明と恭弥は睨み会っていた。雨紗は着ていた学ランを慌ててハンガーにかけた。

「僕の雨紗の部屋に入るなんて咬み殺されたいらしいね。」

シャキン  
トンファー登場。

「ふつ。俺にはコレしかないんでね。」

懐からマイクを取り出した。

「ワオ。下ネタかい？」

「よく見る。普通のマイクだ！」

「へえ。」

雨紗がいなくなっていた。



「あれ。雨紗をかくしたね？」

「今までしゃべってただろうが！」

5分後。

ガチャ

「アイス持って来たよ！」

「チンピラはアイス持って帰ったら？」

「へいへい。雨紗、また来るからな。」

明は雨紗をなでなでした！

「やっぱりここで咬み殺してあげる。」

「ギヤアアアアア！」

こうして明の声は並盛町全土に響き渡った。



## 狙われる風紀委員

いつも早めに家の前で待っていてくれる恭弥の姿がなかった。携帯にかけても出ないし、何か嫌な予感。

通学路を歩いてたらツナが見えた。

「おはようツナ！」

「ウサギか。ヒバリは一緒じゃないのか？」

代わりにリボンちゃんが反応した。ツナは周りを見ながら驚いている。

「どうしたの？」

「どうしたのじゃないよ！あっちにもこっちにも風紀委員ばっかだよ。」

「あ、ほんとだ。」

「ウサギは知らないのか？この土日で風紀委員が8人襲われてんだぞ。」

土日…。そういえば恭弥から連絡ないよね。

「やっぱ不良同士のケンカなのかな。」

ツナが独り言のようにそう言った。

「ちがうよ。」

「恭弥！」

「ヒバリさん！！」

「ちやおっす。」

「いや、ボクは通学してたらたまたま雨紗ちゃんと会っただけでして…」

ツナが無意味に言い訳をした。

「雨紗、迎えに行けなくて悪かったね。…それにしても、身に覚えのないイタズラだよ。もちろんふりかかる火の粉は元から断つけど」

ね。」

「カッコイイ!!」

「やっぱヒバリさんこえ　　っ。」

そして並中の校歌すなわち恭弥の着うたが鳴った。

「じゃあ俺は失礼します。」

「君の知り合いじゃなかったっけ。笹川了平…やられたよ。」

「…!!」

私は不謹慎にまるで刑事ドラマだなあ。と、恭弥を刑事とだぶらせていた。

ツナは笹川先輩の病院に走って行ったけど、私は恭弥に付いて行く事にした。

「笹川先輩も襲われたなんて。風紀委員絡みじゃないんだね。」

「どっちにしる僕はヤツを咬み殺す。雨紗は授業受けるんだよ。」

ポンと頭を叩かれ私は何も言えなくなった。恭弥が行っちゃう！

「恭弥！」

恭弥は私に振り向いた。

「気をつけてね！」

コクリと頷いて走って行った。頑張ってなんて言いたくない。傷つくのが分かって背中なんて押せないから。

でもヤツって誰なんだろう？

教室にいる生徒は三分の一弱で、不安が増すばかりだった。

「ケータイの電池切れたから帰ります。」

獄寺はツナを探しに行ったんだ。私は振り払われても恭弥について

行くべきだったのかな。

呑気に寝てる山本が羨ましかった。

## 運命の選択

獄寺が教室を出てから私は考えていた。恭弥の言っ通り安全な学校にいるか、大好きな恭弥を探すか。

「梶平。」

山本が寄って来た。

「俺は行くけど、ゆっくり考えばいいのな。」

「待って…。私も行く。」

恭弥のいる場所は分からない。

「こっちに行ってみるけど、梶平はどうする?。」

「私はちょっと心当たりがあるからあっちの方に行くね!。」

「おう。」



私の脳裏にあの変わった男、六道骸が浮かんでいた。

確か町であの制服見た時、花が黒曜中だって言ってた。

恭弥…。待ってて。

私が行っても足手まといになるかも知れないけど、立ち止まってるよりもいい。

「クフフ…。君はいつかの逆ナン娘。」

「私は梶平雨紗。恭弥を返して！」

「恭弥？何の事が分かりませんね。犬に千種、この娘を連れて行きなさい。」

「なんなんすか？コイツ。弱そうだびょん。」

「犬、早く捕まえて。」

私は木に登ったが、すぐ犬とか言うヤツが登って来て捉えられた。

「クフフ…。面白くなりそうですね。」

「ぎゃあー！誘拐された！助けてー！」

こうして雨紗は足手まといになるのだった。

## ケモノとメガネ

「こつちだびょん。」

金髪で立たせた髪に前髪はピンでオシャレに止めるその男は、舌がやたら長い。だから舌足らずになるようだ。

「犬、そつちはダメって言われたからこつち。」

帽子をかぶりメガネをかけた男は反対方向を指差した。

「つて、六道骸は？」

「お前さつきからうるさいんらよ！」

「犬。」

雨紗を蹴ろうとしたが、犬は千種に止められた。

雨紗は犬にガツチリ腕を掴まれ、逃げられない状況にある。

「メガネ！メガネの方がまともそうだから聞くけど、雲雀恭弥を知らない？」

カチ…

千種はメガネを押し上げた。

「めんどい。犬が説明して。」

「雲雀恭弥は今頃骸様が痛めつけてるころからムダだびょん。」

えー。私の勘当たりすぎて怖いんだけど。そして、道端の柱にくくりつけられる私。

「お前は目印がちょうどいいんらよ！」

「いいから、行くよ。」

よく分からない場所に置き去りにされた私。

「雨紗ちゃんどうしたの！？」

30分後ツナたちに助けられるのだった。

## 黒曜ランド

ツナと山本と獄寺とビアンキとリボンちゃんと合流できたのはいいけど。

「なんでカカシになつてたの？」

「いやあ、私は目印にいいらしいからね。」

「アホか。やっぱお前はアホウサギだな。」

本当の事を言ったら心配させるだけだし。

「雲雀はまだ見つけてないのか？」

「勘は合ってたよ。」

「とにかく今はこの扉を開けるわよ。」

「つつたつてどつやつて…」

ピアンキはポイズンクッキングの溶解さくらもちで鉄の門を開いた。

それにしても獄寺フラフラだし、山本も怪我してる。なんかあったのかな。

「来た事あるんならお前が道案内しろ。」

「来たつつつたって昔だし、変わりすぎて分かんないよ。」

この会話から行くとツナは小さい頃来た事があるんだなと思った。

そしてこの後あの犬とまた会う事になる。

## 汚い壁

犬とか言う黒曜中の男がいきなり山本に飛びかかったのをみんなが見てる間に私は、またどこかへ連れて行かれた。

「六道骸はなして。」

「正体がバレてる貴方をボンゴレの連中と一緒に場所に置くわけにはいきませんからね。」

トン…

私はコンクリートの部屋に入れられた。

「手荒な真似してすみません。しばらくここにいて下さい。」

「ちょっと!」

パタン…

コンクリートの汚い壁に囲まれた部屋。よく見ると上に人一人抜けられそうな四角い穴がある。

でも、私の身長じゃ飛んでも届かない。

「誰かいますかー！」

シーン

しばらく体育座りして縮こまっていた。

《…どりー…み…もり》

何かが聞こえた気がした。入口以外の3つの壁に順番に耳を付けて耳を澄ます。2つの壁から何も聞こえない。最後の壁に耳をつけた。

《…うよ…そ…へタ》

誰がいる！でも、六道の仲間かも知れない。

と、四角い穴からヒヨコに似た鳥が舞い降りて来た。

《ミードーリタナービクー…》



「恭弥がいるの？」

また鳥は飛んでった。

もし恭弥だとしても、このコンクリートの壁を壊す力がないほど傷ついてるんだ。

トントン…

「え？」

私も二回ノックしたけど、音が響かないから思いっきり蹴る。

いつの間にか鳥が肩に乗ってた。

《ボクガ…タスケル、ウゴカナイデ》

「恭弥…！」

助けに来たはずの私が足手まといになってしまった。

情けない。情けなくて涙も出ないよ。

「私がなんとかするよ!」

防音効果があるコンクリートだけど、ちよくちよく声は聞こえる。  
守られてばかりじゃられない。

私は脱出方法を必死に考えていた。

## 壊せない壁

隣に雨紗がいる。こんな壁普段の僕なら壊せるはずなのに、六道骸から受けた傷は思った以上に深かった。

ガッ…

コンクリートにヒビも入らない。

「雨紗…。」

ガッ

ガッ

あんな高いところに空気穴作るなんてほんと悪趣味だ。

「はぁ…はぁ。」

僕は片膝を立てて座った。気持ちは誰にも負けないのに、この壁を壊せない。

「こんなボロボロの壁…。」

また立ち上がろうとしたら目眩がした。

《ミードリタナービク…》

「クスッ。だから音程外れてるよ。」

この鳥がいるからまだ気は紛れる。

けど、ごめん雨紗。

ちよっとだけ、寝るよ。

トサッ…

瞼のカーテンは鉛のように重くて僕は意識を失った。

## 骸の手

考えてるだけじゃこのコンクリートの部屋から出られない。

キィ…

「僕は間違っていました。」

「六道骸。なんで？」

「貴方は僕のところに来て下さい。」

「嫌だと言ったら？」

骸はニヤリと笑った。

「もちろん逆らうのなら…。」

六道骸の六の目が揺れた。

「考えがあります。」

とりあえず、言う事を聞くフリをしよう。

「手を繋ぎましょう。」

「へ？」

「女性を縛る趣味はないですから。」

ギュッと握られた手。握力が強くて痛かった。

「恭弥をどうする気？」

「彼は邪魔ですから今は閉じ込めておきます。」

ツナたちはどこにいるのかと聞けなかった。とりあえず私にも出来る事があるはず。

「骸って呼んでいい？」

「クフフ。いいですよ雨紗。」

今は大人しく様子を見よう。

## アホウサギはイズコ

山本が犬とか言う男に襲われて、どうにか落ちた穴から脱出した。俺はリボーンに穴の中まで助けに行かされて大変だったんだ。

「山本腕大丈夫？」

「俺は平気なのな。何か足りない気するけど……。」

「アホウサギがいねえんだよ！」

アホウサギとか言いながら雨紗ちゃんを一番心配してる獄寺くん。

「ウサギなら知らねえ男に連れて行かれたぞ。」

「誰だったのかしら。」

リボーンとビアンキは気付いていたのに助けなかったらしい。

「リボーン！なんで助けないんだよ！」



「俺はファミリーしか興味がねえんだ。」

「リボーン素敵。」

この二人……。もう言葉も出ない。

「とりあえず、骸ってヤツを探すついでに梶平を探そうぜ。」

「野球バカが仕切ってんじゃないよ!」

でも、雨紗ちゃんを連れてったのは誰なんだろう。俺は嫌な予感がしていた。

気になるアイツ

こんな事になるなら無理矢理にでも

「…手を繋いどけば良かったぜ。」

「ん？獄寺何か言ったか？」

「野球バカに言ってるねえよ！」

「獄寺くん、山本！」

と止めるように十代目が俺と野球バカの間をいらっしやうた。

「ケンカしてる場合じゃないだろ？」

「すみません十代目。」

「けど、俺らは骸ってヤツの前に梶平が心配なのな。」

「いつ俺が心配だと言った？」

ちびボムの一つでも渡しとけば違ったのかもしれない……！

「獄寺。ウサギがそんなに心配か。」

「リボーンさん！？」

読心術で全て読まれた俺の心。顔が熱くなる。

「そんなに心配ならツナの右腕失格だな。山本にゆずって小指になれ。」

「そんな……！俺は十代目が一番大切です！」

「いや、小指とか違う意味になるから。」

けど、俺はアホウサギを助けたい。

欲張りなのは俺だけじゃなさそうだけどな。

「梶平の事は俺にまかせるのな！」

「山本ならいいぞ。」

「え。リボンさん…?」

獄寺に厳しいリボンでした。

「飯にしよう

足がフラフラする。

「結構歩いたし、やゝ休まない？」

俺の言葉に山本が反応した。

「そうだな。俺腹へって来たぜ。」

「ついでに飯にしましょうよ十代目。あ、あそこなんてどうすか？」

「うん。」

どうやらみんなも疲れたみたいだ。良かった。

「んじゃ、寿司と茶を配るぜ？」

どん...

「どきなさいよ。山本武。」

ビアンキが敵対心むき出しで山本を押し退けた。

「はいツナ。緑黄色野菜のコールドジュース。」

「虫ですかー！」

「冷たくて寿司なんかより美味しいわよ。」

山本と張り合ってるー！ブジョアーと言っ音を立てるジュースに手を伸ばそうか迷ってたら…

グツグツグツ…ボン！

ビアンキのジュースが爆発した。

弁当も次々に爆発。

混乱していると獄寺くんが何かを見つけてダイナマイトを投げた。

「ダッサイ武器。こんな連中に柿ピーや犬は何をてこずったのかしら。」

黒曜中の制服を着たショートヘアの女の子が現れた。

「敵は三人組のはずだ!」

「私だって骸ちゃんの命令じゃなきゃこんな格好しないわよ。しっかしあんた達マフィアの癖にみすばらしい格好してんのね。」

「なっ!」

「えー!?!」

獄寺くんと俺は恥ずかしくなった。

「あー、さえない男見てたら悲しくなってきた。男は金よ!付き合いなら骸ちゃんがいいわ。」

女の持つクラリネットを吹くと、グツグツ言って爆発するようになっている。

「電子レンジと同じ作りになってるのね。」

ピアンキが「私が相手になるわ」と前へ出た。

ビアンキのポイズンクッキングが勝ったが、相手のM・Mはかなり強かった。

「良かったわ。お昼寝の邪魔されなくて。」

「すぴー。」

リボーンのお昼寝の邪魔をしない為戦っていたビアンキだった。

恐るべし愛！



さされたらヤバイ

六道骸に連れて来られた場所は汚いボーリング場の痕だった。

そこには可愛い男の子がいた。けど、しゃべらない。

「骸…、逃げないから手、離してくれる？」

「クフフ…。照れてるんですか？僕は大丈夫ですよ。」

いや、骸の事なんて心配してないから。とは口が避けても言え…

ザクッ

何かフォークがおつきくなったみたいな武器？で男の子にさされそうになり、避けた。

「ちよっ…何？ぎゃ！来ないで！」

骸に手を握られてうまく逃げられない状況。

「骸、どういうこと？」

「雨紗には操り人形になってもらいます。」

ニッコリ。

「いや、ニッコリじゃないから!」

この間も男の子からの攻撃を避けてる私。

「反射神経はいいんですね。」

「さされたら…やっぱ聞きたくない!」

しばらく攻撃は続いた。が、男の子が倒れた。

「使えないですね。ま、フウ太はランキングの為だけの人形ですから。」

私は繋がれてない右手を骸めがけて振りかざしたが

パシッ

簡単に右手も掴まれた。

「激しい愛情表現は好きですよ。」

「さいて…！？」

私はミゾオチを殴られた。

「しばらく眠っていて下さい。」

私は意識を手放した。

## ウサギと言つ女

ウサギを見捨てたのはファミリーに認めねえからじゃねえんだ。

アイツには雲雀の彼女になると言うスゲー事をしでかす力がある。だから自分で何とかできれば…ファミリー以上の存在になるんじゃないのか。

そんな可能性を感じてる。ツナのやつは元から仲が良いからな。ウサギにあめえんだ。

「山本ー！」

今、六道骸と戦ってる最中だ。ツナがどっかいつちまってヤバい感じになってる。

「こらー！何やってんだー！」

噂をすれば影。さすがツナだな。思わずにやけてしまった。

「降りてこいボンゴレ。女を殺して待つ。」

ツナがびびってる間にビアンキが狙われてる。

「死ぬ気になるのは今しかねえぞ。暴れて来い。ラスト一発だ。」

ズガン！

死ぬ気弾をツナめがけて放った。

：

結局剛球を放つ相手はランチアと言って六道骸に操られていたらしい。

その前にバースと言う男がハルや京子を狙ったが、大人イーピンと大人ランボ、そしてシャルマルにより守られた。

『バースヤラレタ』

バースの鳥がその辺を飛んでいる。

「あの建物に六道骸がいるんだね。」

「いよいよだな。」

きつとあそこにフウ太や雲雀…そして、ウサギもいるぞ。

リボーンはまたニヒルに笑った。

ホンモノ？偽物

「いよいよつすね。」

獄寺くんの声で俺たちは黒曜ランドの建物に突入した。

けど、階段が壊れてて入れない。

「みんなー！」

「あれ。雨紗ちゃん！？」

「アホウサギ生きてやがったのか！」

うわー。獄寺くん嬉しそう。

「雨紗…。あなたどこから来たの？」

「それが。その辺に寝ちゃってたみたいで。」

その辺を見ると瓦礫の山が。

「階段見てねえか？」

「階段ならこっちにあるよ。」

雨紗ちゃん、なんか…変。

「ん？ケータイが落ちてる。」

「あ！もしかしてヒバリさんのかも。ヒバリさん…携帯の着うたうちの校歌なんだよね！」

「なあ！！？ダッセー！」

「ツナ、隼人。雨紗がハシゴを見つけたわ。」

自慢気な雨紗ちゃん。やっぱり気のせいかな？

パシッ



シュルル…

「出た！ヨーヨー使い！」

「十代目ここは俺に任せて下さい！」

「獄寺くん！」

「終わったらまたみんなで遊びに行きましょう！」

「そうだよね。行けるよね？」

「もちっす！」

俺は振り返って雨紗ちゃんを探した。

「あれ？」

「ウサギなら消えたぞ。」

リボーンが眉を潜めていた。やっぱりあれは雨紗ちゃんじゃなかった。俺は確信した。

## 強い気持ち

私はフウ太って子に刺されていた。そして六道骸に操られてる。

なんで傍観者みたいかと言うと心の檻に閉じ込められて一部始終を見ているから。

「フウ太何やってんだよ!？」

フウ太がビアンキを突き刺した。ツナはまだ気付いてないみたい。

ヒュンッ

「わっ、コラフウ太!おい、どうしたんだよ。そんな物騒なモンしまえよ!」

「マインドコントロールされてるみてーだな。」

リボンちゃんは気付いたみたいだ。

「そ…そんな！目を覚ませフウ太！」

あんな避け方でよく当たらないよね。リボンちゃんがディーノさんのムチで助けたりしてる。

「クフフフ。どうします？ボンゴレ十代目。」

「…！雨紗ちゃん！？」

「だ…め！」

骸を狙おうとするツナに立ちはだり、私は操られてる心を押さえてどうにか止めようとした。

「ほう？逆ナンするだけありますね。けど、僕には逆らえませんよ。」

「…私はいから！フウ太くんを助けて！」

不思議とコントロールできるようになった。

「フウ太。おまえは悪くないぞ。全然おまえは悪くないんだ。」

ツナがフウ太くんに語りかけた。

「みんなフウ太の見方だぞ。安心して帰ってこいよ。」

フウ太は倒れた。マインドコントロールが解けたらしい。

「雨紗ちゃんは大丈夫？」

「うーん。だいぶ頭痛いかな。」

ツウー…

「ウサギ、鼻血が出てるぞ。」

「うそ…。ぎゃあ!」

早く恭弥を探さなきゃ。私は恭弥の事で頭がいっぱいだっただ。

## 雲雀を探せ

「あれ？雨紗ちゃんがまたいなくなつた！？」

「ウサギはヒバリを探しに行ったぞ。それよりダメツナは前を向け。」

「ぎゃー！」

骸の幻覚に戸惑うツナ。リボンの飛び蹴りのおかげで我に返ることができていた。

…

「恭弥！」

来た道に戻っていると窓ガラスが割れる音がした。

まさか、恭弥がやられてるんじゃない……！

「その声は雨紗かい？」

「ウサギ生きてやがったか。」

恭弥と獄寺が歩いて来た。

「凄い怪我！」

と恭弥に駆け寄ると獄寺が舌打ちした。

「こんなのどうってことないよ。」

「じゃあ一人で歩きやがれ！」

恭弥は肩を組む手を獄寺から離れた。

「ほら。君が一人で立てないんじゃない？」

「くそっ！」

へナへナと倒れる獄寺が可哀想になり手を貸そうとしたら恭弥に止められた。

「獄寺隼人には借りを作りたくないから。」

とまた支え合う二人。

「ぷっ…！なんかアンバランスな二人だね。」

「何しに来たんだテメエ！」

と言われ、恭弥の空いている肩を持つ事にした。

「ワオ。急に邪魔になってきたよ。やっぱり獄寺隼人は置いて行くかな。」

「そうしょっか！」

「アホウサギ！後で覚えてろ。」



皮肉を言える元気がある恭弥を見て安心した雨紗であった。

## 雲雀の活躍

「ヒバリさん！！獄寺くん！！雨紗ちゃん！！」

ツナの声が響いた。

「遅くなりました。」

「さ、3人とも…。」

「分かったか骸。オレはツナだけを育ててるわけじゃねえんだぞ。」

リボンちゃんがカッコ良くセリフを決めた。

「借りは返したよ。」

ポイツと恭弥は獄寺から手を離れた。まるで捨てるかのように。

「いでっ！」

「ちょっ！」

「これはこれは外野がゾロゾロと。千種は何をしているんですかね？」

「へへ。メガネヤローならアニマルヤローと下の階で仲良く伸びてるぜ。」

「なるほど。」

自慢気な獄寺だけど、二人を倒したのは確か…。

「すごいよ獄寺くん！か…体は大丈夫なの？」

「ええ…大丈夫です。つか、あの…俺が倒したんじゃないですねえんすけど。」

ずーんと落ち込む獄寺。恭弥はフラフラしてる。

「恭弥！動いちゃダメだよ！」

「雨紗は黙ってて。…六道骸、覚悟はいいかい？」

「これはこれは怖いですね。」

骸が長い説明をし出した。骸によると恭弥は骨を何本も折られて動くのがやっとならしい。

「遺言はそれだけかい？」

「クフフフ。面白い事を言う。君とは契約しておいても良かったかな？仕方ない君から片付けましょう。」

「また目から死ぬ気の炎が！」

「一瞬で終わりますよ。」

ガキキキキンッ！

ガッ！キキン！

二人の攻撃が速すぎてよく見えない。

ギッ

トンファーで骸の攻撃をとめた。

「君の一瞬っていつまで？」

キュン

雨紗は恭弥にときめいていた。

そして桜を見せられ、獄寺がシャマルに貰ったサクラクラ病の処方箋のおかげで恭弥が骸に一撃を入れた。

この戦いは終わったと思ったが…まだ続くことになる。

恭弥カツコ良すぎ！

一人ドキドキする雨紗がいた。

幻覚、憑依。

「桜は幻覚だったんだ！て言うか…これって…。」

ツナが驚く中。

「ちっ、おいしいとこ全部もってきやがって。」

「ひがまないひがまない。恭弥はカツコ良いからしょうがないよ！」

「げ、アホウサギの目がハートになってやがる。」

「ついにやったな。」

リボンちゃんの言葉でツナが確信した。

「お…終わったんだ。これで家に帰れるんだ！！」

「しかし、お前見事に骸戦役に立たなかったな。」

「ほっとけよ！…ひ、ヒバリさん大丈夫ですか？」

「恭弥…危ない！」

恭弥はうつ伏せに倒れて意識を失った。

「早くみんなを病院につれてかなきゃ！」

「それなら心配ねえぞ。ボンゴレの優秀な医療チームがこっちに向かっている。」

「良かったっスね。」

「獄寺くん無理しちゃダメだよ。」

私は恭弥に駆け寄った。そういえば恭弥の寝顔初めてだっけ。

パシッパシッ…

シャッターチャンスは逃せない。

「雨紗ちゃん！何やってんの　　！？」

「その医療チームは不要ですよ。」

骸が微妙なタイミングでしゃべり出した。しかも銃を構えてるし！

「なぜなら生存者はいなくなるからです。」

「てめー！！」

「じ…獄寺くん！」

骸はいつもの笑みを浮かべてから自分に拳銃を向けた。

よく分からない言葉を呟き、自分のコメカミに撃ち放った。

しーん…

「や…やりやがった。」

「そんな…。」

「ドッキリだよね？ツナ。」



ツナは無反応だ。

「なんでこんなこと。」

「捕まるくらいなら死んだ方がマシってヤツかもな。」

「やるせないっス…。」

刑事ドラマとかの中だけでしか見た事のない場面を目の前で見ってしまった。ツナも吐きそうになってる。

「ついに…骸を倒したのね。」

ビアンキが起き上がった。

「アネキ！」

「良かった！ビアンキの意識が戻った！」

「無理すんなよ。」

ん？何か嫌な予感がする。自分が操られてた時と似た感覚。

「肩貸してくれない？」

「しょうがねえな。き、今日だけだからな。」

「う…」

「獄寺くん！！いつちゃだめだ！！」

「え？」

そう。この時から骸はシナリオ通りにことを進めていたの。

## 意識の切断

覚えているのはピアノキが獄寺にあの武器を向けて頬を傷つけた事まで。

私は誰かに気絶させられた。目を覚ましたら自分の部屋のベッドに寝ていてまるで夢を見ていたみたいだった。

私はツナの家に走っていた。

「ツナ！」

「あら、雨紗ちゃん。ツナならリボンちゃんと寝てるわよ。」

「おじゃまします！」

私は失礼も承知でツナの部屋に入った。

「ツナ！」

「ウサギか。ミゾオチにジャストミートしたようだったのによく生きてたな。」

「アレ、リボンちゃんのパンチ!？」

「まあな。ツナはまだ寝てるぞ。ヒバリならこの病院にいる。ヒバリのことだ。自力で学校に移動してるかもな。」

「ありがとうリボンちゃん!」

ミゾオチにパンチをくらわされ何があるがどうかは謎だが、私は学校に走った。

休みの学校…

「やっぱり校門閉まつてるよ。登るしかない。」

ガシャッ

私は柵に手をかけた。

「何やってるの?」

「恭弥！……ってめちゃくちゃボロボロだし！」

ガラガラ…

草壁先輩が門を開けてくれた。

「草壁は下がっていいよ。」

「はい。委員長。」

フラフラ…

「フラフラしすぎ！」

「はあ。酔拳も知らないのかい？」

「えー！？誤魔化すの下手だよ！」

恭弥はフラフラしながら私の手を握った。

「保健室に連れてって。」

ヤバイ。恭弥が甘えるなんて…ムッスーの次に可愛いすぎ！

「うん！」

歩きながら疑問をぶつけた。

「骸：どうなったの？」

「僕も気絶してたから知らない。」

聞かない方がいいのかな？

「けど、沢田綱吉が倒したよ。」

「なんで分かるの？」

恭弥はニヤリと笑った。

「強いのか弱いのかよく分からないからさ。」

「恭弥嬉しそう。」

「ワオ。僕が機嫌が良いのは雨紗がいるからさ。」

「でも、戦ってる恭弥カッコ良かったよ。」

拗ねたように言つと頭を撫でられた。

「次にボスが現れたら僕が倒すからね。」

根に持つてる　！？

どこまでもバトルマニアな彼なのでした。

可愛い鳥ちゃん

一ヶ月後。

「委員長！本日は野球部の大会です！！」

「うわあ！草壁先輩いきなりすぎ！びびった。」

恭弥は興味がないのかあくびした。

「よし。私行ってくるね！」

「よし。じゃないよね。ヒバードが僕を一人締めしてもいいのかい？」

《ヒバリヒトリジメ》

そう。このチンチクリンな鳥、恭弥の頭に乗ったり、周りを飛んだり、歌ったり。

恭弥に色気を振り回してるとしか思えないのです！



「クスッ。まさかヒバードに焼きもちなんて。やっぱり雨紗はサルだったんだね。」

ズッキーン…

今心の凄いとこ入ったよ。

「どう考えても私より恭弥と一緒にいる時間多いよね。まさか…、トイレやお風呂まで？」

「ふぁーあ。くだらない。」

恭弥はまた寝転んだ。屋上が似合う。が…、黄色い鳥がちらついて恭弥のかっこよさに集中できない！

私はあることを考えた。恭弥が寝静まったのを見てから…。

シュッ…

「ねえ。何してるの？」

説明しよう。私は隠し持っていた虫鳥り網でヒヨコを捕まえようと

したが、恭弥の頭を捕まえてしまったのだ！

「そんなに僕が欲しいのかい？おいで…。」

恭弥が私の為に両手を広げてる。

が。

《ミドーリタナビクー…》

恭弥の胸元に飛び込む黄色いヒヨコ（に似た鳥）。

「二人きりになれなくなったね。」

「切なそうな顔しても。恭弥のせいだから！」

「最近の雨紗うるさいよ。」

こうして恋敵が現れた。

## 野球大会

やーっぱりいないのな。ツナの声も獄寺の声も聞こえるし、二人のダチが見に来てくれれば充分なのに。

「梶平誘えばよかった。」

バッターボックスで呟いてから俺はバットを振った。

カッキン

この音が好きだから野球はやめられねえ。

ホームランを決めて余裕で走っていると、客席の梶平が見えた。

この一瞬でもヒバリより俺を選んでくれたんだな。

なんて自惚れる俺はバカなのかも知れない。試合が終わってからツナ達のところに行くと、笑顔の梶平がいた。

「山本、ホームランすごかったね！」

「みんなの声援のおかげなのな。」

「けっ。相手がサボりすぎだぜ。」

「獄寺くんがダイナマイト投げようとしたのには驚いたよ。」

梶平を今すぐ抱きしめたい衝動にかられた。

「梶平はどう思った？」

ドキドキドキドキ…

「ごめん！走ってるとこしか見てないんだ。」

まあ、ここにいてくれるだけで嬉しいと思うのは、誰にも内緒にしておこう。

「山本。さすがにやけすぎだぞ。」

読心していたリボーンに厳しい一言を貰う山本であった。

そういえば…

俺、沢田綱吉は一年の頃は京子ちゃんを見る為に学校に来ていた。

けど、今は山本や獄寺くんって言う友達もできて学校に来るのが当たり前になってる。

「ツナー！おはよ。」

「おはよう雨紗ちゃん。」

そうそう。友達ができる前は雨紗ちゃんの後ろに隠れてたっけ。

「なんかツナたくましくなって来たね。」

「え？」

「寂しくなるからそれ以上成長しちゃダメだからね。」

リボーンと出会ってから俺の人生は変わった。マフィアとか考えるの嫌だけど、きっと何もしなかった頃よりは心も体も強くなれてる

と思う。

「おはようございます十代目！」

「はよ！ツナ。」

「おはよう。獄寺くんに山本。」

獄寺くんの敬語には慣れちゃったけど、まだこしょばゆい感じはあるかな。

「英語の宿題やって来たか？」

「あー！忘れてたよ。」

「よかった。一緒にやろうな！」

「ちょーっと待った！十代目、分からないところがあれば山本より俺に聞いて下さい。」

「獄寺くんは終わったの？」

「はい！10ページ先までは予習済みです！」

獄寺くんがメガネかけたよ。

「じゃあ見せて欲しいのな。」

「これだから野球バカは！自分の力でやんねえと意味ねえだろ。」

静かになった雨紗ちゃんを見ると、携帯を眺めていた。

「ヒバリさんから？」

「またケンカしちゃったんだ。」

と、見せられた内容は…。

【僕に咬み殺されたいって意味分かってるのかい？】

いや、この文章だけ見せられても俺が意味分らないから！

「ツナには分かるよね？」

「…相手して欲しいってこと？」

適当に言ってみたら雨紗ちゃんはパアツと明るく笑った。

「そ！さすがツナ！いや、十代目！」

「アホウサギが十代目って言うな！いいか？ファミリー以外はだ…」

こうして俺の考えてたことはなんだったかすっかり忘れてしまった。



試しに…聞かせ

獄寺に呼び出されたのはこれで二回目だ。今度は放課後の保健室に呼び出された。

シャル先生はいなくて、二人きりと言う気まずい雰囲気。

「なに？」

「ア…梶平！」

アホウサギと呼ぼうとしたのが分かってちょっと笑ってしまった。

「急にどうしたの？」

「雨紗…って呼んでいいか？」

「……………は？」

「俺の事は隼人って呼べ。それだけだ。」

保健室から出ようとする獄寺のシャツの裾を掴んだ。

「私にそう呼んで欲しい理由を説明しないと叫ばないから。」

「お前はアホウサギで充分だな。手を離しやがれ。」

ピシャン

「変な獄寺。」

…

アホウサギの事を好きか嫌いか。自分で試してみた。

掴まれてたシャツのあたりがまだ熱い。

「好き…なのだよ。」

恋なんてダセーとは思わねえけど。この感情はもっと特別なもの

だと感じていた。

## 変化

「恭弥…？」

最近の恭弥はおかしい。今応接室にいるけど、私は右手を繋がれている。

「もうあんな思いしたくないから繋いでたい。ダメ？」

確かに壁の向こうに恭弥がいるのが分かってるのに何もできないのはもどかしかった。

「もうあんなに辛い事はないから大丈夫だよ。」

ギュツと強く握られた手。私は恭弥の顔を見上げた。

「そうかな？僕たちにはまだまだ試練があるよ。そうじゃなきゃ、燃えないからね。」

「恭弥となら乗り越えられそう…かも。」

しばらく見つめ合って手を繋いだままキスをした。

恭弥の飲んだコーヒーの味がした。

「学校でキスするのは好きかい？」

「うーん。風紀委員長が学校でキスしちゃダメなんじゃない？」

「僕はいいのさ。」

窓の外からヒバードが飛んで来た。そして私の肩に乗った。

「あれ？恭弥はあっちだよ。」

《ヒバリノオキニイリ》

「クスッ。僕が教えた事は全て把握してるらしいね。」

私はヒバードの頭をそっと触ってみた。フサフサした羽をしてる。

「私はね。恭弥が好きなんだよ。」

《キョウヤ…スキ》

この鳥の良さを少しでも感じることができた。

## 月夜に光る銀髪

「アイス食べたい。」

夜突然アイスが食べたいと思うのはよくあること。私は近くのコンビニに向かって歩いた。

「てめえ、何で日本に来たあ。ゲロっちまわねえと三枚におろすぞお。オラア。」

「答える必要はない。」

ビルの上にいる二人組。まさか恭弥じゃないよね？と目を凝らして見た。

サラサラッ

ロングの銀髪が風にそよいでいる。

「ひょっとして、コスプレの撮影会？にしても必死に戦ってるなあ。アングルが大切なのかな。」

関わりたくないの、私はまたコンビニに向かって走った。

次の日。

「恭弥の知り合いに銀髪でロングヘアの人いる？」

手を繋いで登校する私たち。

「僕の知り合いは少ないからね。銀髪なんて…、獄寺隼人は知り合  
いじゃないけど。あれは銀髪じゃないのかい？」

「んー。髪の毛がいきなり伸びたとか？」

「スケベは伸びるの早いらしいから、あり得るね。」

「はあ？聞こえてんぞ！」

少し前を歩くツナと山本と獄寺。



「確かに獄寺はムツツリなのな。」

「や…山本！」

「オープンすぎるテメエに言われたくねえ！」

とまあ賑やかだった。

「…咬み殺していいかい？」

「ダメだって！ツナ走って！」

前の三人が走り出したところで恭弥が呟いた。

「僕も銀髪になろうかな。」

「見てみたいけど、恭弥は黒髪がかっこいいよ！」

「クスッ。冗談だよ。」

本気にしてしまった雨紗でした。

## 突然のご馳走

「母さん飯まだー?」

俺はランボとイーピンと階段を下りた。いい匂いがリビングから漂って来る。

「なんだ。もうできてんじゃ…。」

リボーンがもぐもぐ食べてるし。

「…って! すごいごちそー!!」

「ランランラン。」

「しかもまだ作りつつけてる…!!?」

母さんは鼻歌なんて歌いながらまだ料理を作っていた。山盛りのご馳走があるのに、まさかりボーンがまた変なのを…。

「ツナ。これはどういうこと?」

ビアンキがエビフライをくわえながら聞いてきた。

「ツナ兄が100点取って来たとか？」

フウ太も嬉しそうに聞いて来る。

「え…？いや。普通に今日もダメライフだったけど…。か…母さん…？」

まだ鼻歌歌ってるし。

「母さん！！」

「あらツツ君ー。」

包丁を息子に振り回す母親がここに  
！

「包丁危ないって！！」

母さんは包丁を置いた。

「どうしたんだよ？何か態度変だよ。」

「あーそうかしら…？そういえばツナにまだ言っ  
てなかったわね。」

次の発言に俺は驚くことになる。

「2年ぶりにお父さん帰って来るって。」

めっさ嬉しそうで悪いけど。

「え！！？な！！！はあ　　！！？」

ピアノキはまだエビフライをくわえていた。

「そんなに驚くこと？」

しかもフウ太までエビフライくわえてる。

「見つかったんだあの人!!」

「見つかったって何のこと？」

「だって父さん蒸発したって！」

「やあね。ツナったら。だったら学費は誰が稼いでるの？」

「ふわっ！そういえば！」

母さんによると父さんは外国で石油を掘ってる泥の男らしい。

怪しい。怪しすぎる。あんな父親。今更帰って来られても。

翌日、山本と獄寺くんに話したら…

「俺んちなんかもっとドロドロのぐちゃぐちゃですしね!!」

笑顔で凄いこと言う獄寺くんを見てたらバカらしくなった。

## とんだ勘違い

今日は迎えに来てくれた恭弥がものすごく機嫌がいい。

隣で並中校歌の鼻歌を歌ってるし。

「あのー、恭弥？良いことあった？」

「クスッ。とぼけるなんて雨紗は照れ屋だね。」

ええ。もう気味が悪いくらいに機嫌がいいんですよ彼！

「この指輪。気持ちは嬉しいけどまだ雨紗は中学生だから、結婚指輪には早くないかい？」

「は…？そんな指輪知らないよ。しかも恭弥も中学生じゃないの？」

「ワオ。雨紗がくれたと思ったからとつといたんだけど、捨てよう。」

言葉の通り指輪を投げ捨てた。私は反射的に拾って指輪を見た。

雲の絵が描かれた指輪？

何故か頭にリボンちゃんやツナが浮かんだ。

「ね、試しに持ってたら？幸運の指輪かも。」

「雨紗にあげるよ。」

「恭弥が持っていないとダメだよ。」

恭弥にジッと見つめられた。

「まさか…、何か知ってるのかい。それとも、僕をからかった？」

「知らないけどさ、何かこの雲とか、意味有りそうじゃない？RP  
Gに出てくる守りの指輪みたいな！」

「へえ。じゃあ落とし物として僕が預かるよ。」



守りの指輪どころか、恭弥が危ない目に合うなんてまだ知るよしもなかった。

雲とムチ

応接室。

恭弥はソファーに座り、指輪を人差し指と親指で転がしていた。

ガラ…

「おまえが雲雀恭弥だな。」

「…誰…？」

金髪の外人とスーツを来たおじさんが部屋に入ってきた。

「俺はツナの兄貴分でリボーンの知人だ。雲の刻印のついた指輪の話がしたい。」

「ふーん。赤ん坊の…。じゃあ強いんだ。」

恭弥はゆっくり立ち上がり、口元をつり上げた。

「僕は指輪なんてどうでもいいよ。」

あなたを咬み殺せれば…。」

今度は金髪の…ディーノが口の端を持ち上げた。

「なるほど。問題児だな。いいだろう。その方が早い。」

ビツとムチを張るディーノに対し恭弥はチャッとトンファーを構えた。

…

「…でね、恭弥に言ったの。守りの指輪かもよって。」

帰り道、ツナと話していたら、ツナが急に固まった。

「ツナ？」

「リボン！どこだー！」

いきなり走り出すツナ。

「ちゃおっす。」

「リボンちゃん！ツナ行っちゃったよ。」

「ウサギ。これからヒバリが危険な目にあっても、彼女でいるつもりか？」

リボンちゃんは赤ちゃんなのに、威圧感が凄かった。

「恭弥が危険な目にあうなら私も一緒に決まってるでしょ。」

ニヤリ…

「口だけだったら、一発くらわすぞ。」

またピストルがリボンちゃんの手元に！

「リボーン!!」

ツナのおかげで助かったのです。

## バトルマニア

恭弥はバトルマニアなんだ。手を繋いだりキスしたり、普通の恋人同士がすることばかりしていたらすっかり忘れていた。

そう。彼のバトルマニアの血を目覚めさせたのは…。

「指輪のことなんてどうでもいいから、早く昨日の続きしようよ。」

「まあ、そう焦るなって。」

「早くしないとここで始めるよ?」

はい。このディーノさんと恭弥の会話を聞いたのこれで3回目。3回目とカウントしないのには理由がある。

恭弥とは今日も一緒に登校して来た。その間はまあ…ラブラブっちゃーラブラブ。

学校に着いてディーノさんを見た途端、恭弥の目の色が変わって屋上へ行くのだ。恭弥もディーノさんも傷だらけだし、最初は止めようとした。

「雨紗には関係ないよ。」

と言うか、一回必死で止めようと抱きついたらこの一言でつきはなされた。

「ディーノのせいだ…。」

「うつ…雨紗ちゃん？」

教室に入って机の横にカバンをかけて、座った瞬間に私は呟いていた。隣のツナは聞き逃さなかったらしい。

「てか、ツナも怪我しすぎ。自分を痛めつけて何が楽しいの？」

「楽しいどころか痛いし苦しいことばっかだけど、俺は強くなりた  
いんだ。」

「…ツナ。」

強くなりたい…か。恭弥もそうなのかな。

「獄寺は？」

ツナの席に近づいて来た獄寺にも聞いた。

「俺は十代目の右腕として…」

「いいや。やっぱ、山本に聞こう。」

「おい！アホウサギ最後まで聞きやがれ！」

私は野球部の連中としゃべってる山本の近くに行った。

「お。梶平から俺に用とか珍しいのな！」



「山本はさ、なんで戦うの？」

「ん？そりゃ、ツナや獄寺とツルむの楽しいから…だぜ？」

山本スマイルで返されたけど、山本は負けず嫌いなところがあるから本音は言わないんだと思う。

「そつか。頑張つてね！」

「頑張つたらハグして欲しいのな。」

と言った山本を隣の石田が冷やかしていた。

それより、恭弥にも聞いてみなきゃ。私は休み時間になってから応接室に走った。

ガラガラ…

「恭弥！」

「そんなに慌てても僕は逃げないよ。」

機嫌が良さそうだから、今聞こう。

「恭弥はなんで戦うのが好きなの？」

「好きと言うより、咬み殺すのは息をしてるのと同じくらい僕にとっては当たり前な事なのさ。」

「じゃあ戦わないと生きていけないの？」

「……………」

恭弥はジッと私を見た。

「やっぱり雨紗はバカだね。」

こうして真相はつやむやなままになってしまった。

## アウト オフ 眼中

いつもなら7時すぎには家の前で待つてくれる恭弥が、20分すぎても現れない。

「…だから珍しく俺んちに來たんだね。」

「いや、たまにはツナと行ってもいいかなあってね。」

別に寂しいわけじゃないから。

「おはようございます十代目…!」

「おはよう獄寺くん。」

「よ! 獄寺。」

「なんでアホウサギが十代目の隣にいやがる!」

獄寺は私とツナの間に入った。

「だってツナと友達だし？」

「ヒバリにフラれたただけだろうが！」

「ふ…フラれては無いもん！」

ツナはまあまあと私たちをなだめていた。

「山本は？」

「朝練らしいよ。両立は大変そうだね。」

両立と言つのは戦いに向けて鍛える事と野球との両立ってこと。

「ヒバリの邪魔してないようだな。」

「リボーン！」

リボンちゃんが花のコスプレをして現れた。

「やっと集中できてるみたいだぞ。」

「…そつか。ハハハ…恭弥はバトルマニアだからね。」

「雨紗ちゃん暗いよ！」

「これからもアホウサギは関わらねえ方がいい。」

獄寺が真剣に私を見た。

「もっ…ほっというよー！」

ツナに八つ当たりすることしかできないのですた。

「え…俺？」

とばかりを受け困っていたツナくん。

## 屋上でのバトル

「よう。恭弥。」

よく晴れた日の屋上。

「今日は戦う前に話をしてえ。騙してるみてえでスッキリしねえかな。」

恭弥とディーノさんが向かい合って立ってる。

「いいよ興味ないから。あなたをグチャグチャにすること以外。」

私は物陰に隠れて様子を見ていた。二人がどんなことを話してるのかとか気になって仕方ないから、二人が来る前から隠れていた。

「まったく。困った奴だぜ。」

ディーノさんが困ったように頭をかいた。

「ねえ。真剣にやってくれないとこの指輪捨てるよ?。」

「なっ…まて！のやろーっ。」

焦ったディーノさんを見ていたロマーリオさんがお腹を抱えて笑っていた。

「わーったよ。じゃあ交換条件だ。真剣勝負で俺が勝ったらおまえにはファミリーの一角を担ってもらっぜ。」

二人は戦いだした。

あの指輪を捨てるのを止めてなかったら恭弥は私のそばにいてくれたの？

「私に気付いてよ。恭弥のバカ。」

戦ってる音がなんだか耳障りに感じて私は耳をふさいだ。

恭弥にとって一番良い彼女はどんななんだろう。少なくとも今の私じゃない。



その日はマイナスな事ばかり考えた。

## ランボさんの頭

恭弥とディーノさんの戦いを目の当たりにした私は、一人で帰宅していた。

「一時間くらいサボっていいよね。」

「あー！ウサギ！」

振り向くとランボさんが走って来た。

「ランボさんはいつも元気だね。」

「ぶどうのアメ食べれば嫌なこと忘れるんだもんね！」

ランボさんはモジャモジャな頭から飴玉を取り出して包みを開いて口に入れた。

ピカッ

ランボさんの頭から何か光ったから、その正体確かめるためにか

がんでランボさんの頭をよく見た。

それは雷の紋章の入った指輪だった。

「その指輪どうしたの？」

「んー？オレっち指輪なんて持ってないもんね。あらら、ウサギは目も悪い…」

ズベツ…

ランボさんは見事にコケた。

「…が・ま・ん。」

起き上がりながら涙目でそんなこと言うランボさんが可愛いく思えて来た。

「ランボさん大丈夫？」

「うわあああ…！」

ランボさんはバズーカを取り出し自分に向けてはなった。

もわもわ…

「…ら、ランボさん？」

「やれやれ。若かれし雨紗さんにまたお会いできるなんて。」

牛柄のシャツ。伊達っばいお兄さんが目の前に現れた。

「あなた、ランボさんをどこにやったの？」

「ランボはこの…」

「ロメオー！」

突然ビアンキが後方から走って来た。

「…っ！？」

その牛柄のお兄さんはひたすらビアンキから逃げて行った。

「なんなの？」

明日でもツナに聞こう。

私はランボさんを探しながら帰った。

## タノミコト

「雨紗が俺待ってるとかマジ珍しくね？」

いつの間にか金髪から赤毛に染めた明がダルそうに歩いて来た。ちなみに今、明の家の前にいる。

「てかさ、何で部屋で待ってねえの？」

「私彼氏いるからね。」

「で？何？ここじゃ暑くて死にそうなんだけど。」

明が偉そうなのが腹立って来た。

「明って空手二段だよね。」

「今更なに？あーアチィ。」

「…教えて？」

ミンミンミンミン

蝉が忙しく鳴いてる。

「…。雨紗は無駄に高いところ登りすぎ。跳ねすぎ。そして」

「そして？」

ゴクツと生唾を飲み込みながら次の言葉を待った。

「無防備すぎ。」

ガンッ

私ってそうなんだ。ショック。

「けど本気ってんなら、…夕方に裏の空き地に来い。」

「はい！」

パタン…

こうして私がやれる事…すなわち自分を守れる程度は強くなる。つて事。

「…あ、ジャージでいいのかな。しかも夕方って何時？」

「雨紗ー！6時な！」

絶妙なタイミングで二階の窓から明が叫んだ。

…明で大丈夫かな。不安になりながら家に帰った。



## 特訓

夕方の空き地。近所の子供たちが賑やかに遊んでる。

「軽く突いてみる。」

「へ?...こっ?」

軽くパンチしてみる。

「はい。握り方違う。親指以外はギュッと丸めて...こっ、第2関節部分に親指を添える。」

「ふむふむ。」

「中指を少し出したら相手へのダメージがヤバイ。」

明の真面目な特訓に拍子抜けした。

「あと、突く時は必ず引きを忘れない。」

自分の腰に手を当てて説明する明。

「片方の手は90度に曲げた手を肩の高さまで上げる。…そう、それをキープだ。」

足は最初は肩幅まで開いて水平に引く。左足を足の指と膝が重なる位置。

とか、スラスラと説明されるけど頭がちんぷんかんぷんで目眩がしてきた。

「基礎を覚えねえと、自分を守るところか逆に傷つける事になるかな。」

「…明日からメモ帳持って来ます。」

「大丈夫。体が先に覚えるって。」

明は形を見せてくれた。キレのある動きや鋭い視線はカッコいい。

パチパチ…

「この形を覚えればある程度動けるようになるぜ。」

「形って凄いだね！」

「形は一人でしてると見せかけて見えない相手と戦ってる流れそのモノなんだ。見えただろ？俺の見えない敵が。」

深すぎて分からない。

「まだ見えないけど、私頑張って覚えるよ！」

「まずは基本の突きからだな。」

そんな二人を見つめるヤツがいた。

「アホウサギと赤毛のヤロー？」

紙飛行機の入った段ボールを抱えた獄寺でした。

紙ヒコーキ

紙ヒコーキがヒョロヒョロと飛ばされる。  
寝込むシャマルによつて。

俺はボムを飛ばした。

けどなかなか当たんねえ。

「おい。紙ヒコーキ切れたぞ。」

「ちつくしょー！なんで当たんねんだよー！」

「お前は何も分かつてねえな。」

紙ヒコーキを折りながらシャマルの言葉に耳を傾けた。

「…コツとかあるのかよ。」

紙ヒコーキ折るスピードも速くなつて来た。

「さあな。あー…腹減った。今日は帰るか。」

シャルは立ち上がり、歩いてった。

いくら飛ばしても当たらない紙ヒコーキがだんだんとアホウサギに見えて来た。

「はあ…。それどころじゃねえだろ！」

赤毛の男に、ヒバリ。梶平の周りにはイケメンだらけだ。

「あー！らしくねえ！」

俺はひたすら紙ヒコーキを折った。

## 夜の学校

「最近夜の学校が騒がしいんだよね。」

ディーノさんと戦ってばかりいた恭弥とやっと二人きりになった。

「夜の学校？」

「それも全部この指輪のせいだよ。赤ん坊によると、バトルは始まってるんだってさ。」

恭弥はふぁー…っとのんびり欠伸をした。

「恭弥は行かないの？」

「様子を見に行っただけど、元通りに直せるらしいから今のところは口を出さない事にしたよ。もしも一歩たりとも校舎に入るところを見たら誰であろうと咬み殺す。」

「…そう。」

「指の腫れどうしたの？」

恭弥にバレないように包帯を外していた左手の人差し指。ただの突き指だけど、あっけなくバレてしまった。

「こないだの体育で突き指しちゃったの。」

「誰からのボール？」

ギラつく瞳はその相手を咬み殺すと言っていた。

「自爆だから大丈夫だよ。」

「それは見てみたかった。」

「恭弥が戦うなら私も戦うから。」

恭弥が棚にファイルをしまった。

「雨紗が戦う前に僕が気絶させてあげる。」

「それってつまり…。」

「戦わせないよ。」

ニヤリと笑う恭弥を見て私はもっと強くなろうと心に決めていた。



## リボンの忠告

「また腕が下がってる！家で鏡の前で練習しろつつただろ。」

「明んちみたいにおつきい鏡ないんだもん！」

空手の形の指導を受けながら文句ばかり言う私。

「ウサギ。ヒバリの戦いをアシストするつもりか。」

「リボンちゃん！」

「雨紗！今形の最中だから話しながらも形を続けるよ。」

師匠の明に言われたので、形をしながらリボンちゃんと話すことにした。

「そうだよ。私は恭弥を助けたいの。」

次は中段蹴りで…。

「手伝ったら反則負けだぞ。」

「うん。分かつ…ってええ!？」

「雨紗!とまるな。流れが大事って言ってるだろ。」

確か次の動きは下段払い。

「くれぐれも邪魔だけはするんじゃないぞ。」

リボンちゃんはいなくなった。

形も終わって礼をする。

「で…。今の饒舌な赤ちゃん誰？」

「ああ見えて、かなり危険なんだよ!」

「形のやり過ぎで頭打ったか？」

「違う！」

意味のないことなんてないはず。私は練習に集中した。

## お誘いの手紙

「雨紗ー、あんた宛てにに手紙来てたわよ。」

「はい。」

お母さんの声でリビングに下りてった。

「名無しだけど、カミソリには気をつけなさい。」

「お母さんドラマの見すぎ。」

なんて笑いながら、気をつけて開けた。

真っ白な封筒を開けると一枚の手紙が入ってた。

【本日10時並盛中学校にて雷の守護者の戦い有り】

それだけ。確か恭弥は雲だった。なんで雷の戦いの知らせを私にす

るのかな。

「あら？ラブレター？」

「まあね。」

雷：どつかで雷の紋章の指輪見た気がする。

私はランボさんの頭に刺さってた指輪を思い出した。

「まさか…ね。」

夜10時。私は並中に忍びこんだ。二人の女の人に関係者以外立ち入り禁止と言われ、困っていたらリボンちゃんが助けてくれた。

「ウサギもファミリー候補だぞ。」

「ですが…。」

「関係者ならいいんじゃないか。」

リボンちゃんのおかげで私も入れた。

屋上にランボさんとイカツイ男が立ってる。次の瞬間、ランボさんに雷が落ちた。

泣きわめくランボさん。

「ランボ！」

ツナが叫んでる。

「なんで、こんなことするの？」

「今日はお前に現実を見せるためにここへ呼んだんだぞ。」

「現実…？」

「ヒバリもこんなふうに戦わねえといけねえんだ。ウサギはこんなヒバリを見てられるか？」

ランボさんが泣くたび私も泣きたくなつた。手出しはいけないのに、ツナがランボさんを助けていた。ツナが凄くカッコ良く見えた。

「私、恭弥の戦いもちゃんと見ていたい。」

「手出しはできねえんだぞ。」

「うん。分かつてる。」

大好きな彼氏が傷つくのを見るのは怖い。けど、見ないで後悔するよりは見守っていたいんだ。

## 獄寺の決意

「アホウサギがなんでこんなとこにいやがる！」

ザンザスとか言う怖い人を目の当たりにして動揺している私に獄寺が気付いた。

「私は恭弥に傷ついて欲しくないからここにいるの！」

「お前なんか足手まといになるだけだ！」

獄寺を怖いと感じた。本気で拒絶されるのはさすがにキツイ。

「まあまあ、獄寺は梶平が心配なだけなのな。」

「…野球バカは黙つてろ。」

「内輪もめかあ？」

ザンザスがこっちに気付いた。



「雨紗ちゃん何してるの!?!」

ツナがやっと私に気付いた。

「俺が呼んだんだぞ。」

「リボンさん!」

「獄寺、ムキになりすぎだ。」

ザンザスはまたツナと言ひ合い始めた。

「獄寺には関係ないよね。」

「おい。」

私は胸ぐらを掴まれていた。

「お前のいる世界じゃねえんだよ。」

獄寺の言葉は私の心にズサリとのかかった。

「そんなの分かってる!」

「分かってねえだろ。お前なんかすぐ死ぬんだよ!」

「うるさい!」

獄寺は私から離れた。

「…俺は守らねえからな。」

「安心しろ。梶平は俺が守るからな!」

「私、今日は帰るよ。」

心が痛い。ここにいたら泣きそうだった。

## 宣戦布告

「こんな時間に何だい？山本武。」

守護者の戦いの前にヒバリに会いに来た。

「ヒバリには一言言っておこうと思ったのな。」

「そんなに距離をとって恥ずかしいと思わないのかい？」

「あはは…戦う前に怪我したくないからな。」

ヒバリは眉を細めた。山本が自分に用事なんて初めてだと警戒しているようだ。

「俺、梶平が好きだ。」

「…僕に言う言葉じゃないよね。」

「だな。」

山本は学校の方向に歩いて行った。

「山本武。」

「ん？」

「今から学校に行くつもりなら、この僕を倒してから行け。」

山本は雨紗に会いに行けば良かったと後悔した。

「山本！ここは俺が引き受けた！早く行け！」

「邪魔しないでよね。」

「ディーノさん、ありがとうございます！」

ヒバリはディーノの出現に喜びを隠せず、ニヤリと笑った。そして  
山本の存在など一瞬で忘れていた。

## ツナという男

「リボーンどういうことだよ！」

山本の戦いの前の日、俺はリボーンを問い詰めた。

「ウサギか？こっちから呼ばなくても来ていたはずだ。」

「ダメだよ！雨紗ちゃんを巻き込んだら許さないぞ！」

「ウサギは関わらねえほうが傷つくんじゃないかねえのか？そんな事も分かんねえのか。さすがダメツナだな。」

ただでさえ雨紗ちゃんを巻き込んだのに、これ以上はダメだ。  
俺がなんとかしないと。

そして次の日の学校。

「おはようございます！十代目！...」

「おはよう獄寺くん。」

「十代目…?」

どうやって雨紗ちゃんに説明しよう。

「そういえばアホウサギのやつ。本気なんすかね。」

「ダメだよ。」

「はい！アイツの邪魔するんすよね！！俺も協力します！」

「獄寺くん。この事は二人の秘密だよ！」

「はい！」

獄寺くん嬉しそうなんだけど。一人よりはいい…よね。

鮫男と負けず嫌い

今回は山本の戦い。

「アホウサギ。」

「あ、獄寺。」

学校に着く前に包帯でぐるぐる巻きにされた獄寺に会った。

「俺の戦いには興味無しかよ。」

「へ？獄寺終わったの？」

「ちっ！」

学校に着いてから校舎の屋上を見上げると恭弥が見物していた。



「もう1勝3敗で後がねえからな。色んな意味で注目の一戦ってわけだぞ。」

「よし！―！そうと決まれば円陣にヒバリも入れるぞ！―奴はどこだ！？」

「あいつは無理だろ。」

「ハハっ、だな。そうだ。梶平が入れよ。」

山本に言われ、困っていると。

「そうだよ。おいで雨紗ちゃん。」

「恭弥は良いガールフレンドを持ったな。」

「そうだ。バジル君も入れよう。」

ツナにより、私とバジル君は円陣に入った。

「山本ファイッ！！！！オー！！！！！！！！！！」

山本が戦う場所は特殊な構造の建物だった。常に水が流れ出している。

山本は笑顔で戦いに向かった。

「梶平！」

「ん？」

「応援よろしくな！」

あのひょうひょうとした山本が戦うなんて想像できない。

「うん。まかせて！」

いつもより笑顔がまぶしかった。

「山本はお前に見せてえみたいだな。」

「リボンちゃん。」

「ウサギ。目をそらすんじゃないぞ。」

私はゆっくり頷いた。

スクアーロは銀髪ロン毛男。喋り方が変わってて最初笑ってしまいそうになった。

スクアーロに押されながらも山本はどうか避けている。

「ロン毛の爆風かわしたよ!!」

「あれが山本の時雨蒼燕流。まだ粗さはあるがこの短時間までよくここまで…」

喜ぶツナにディーノさんも説明しだした。

その後は目を塞ぎたくなるような場面の連続だった。山本は肩を怪我して、さらに右目まで。

「山本!」

頑張っとは言えない。ただ名前を呼ぶのが精一杯だった。

そして山本はうつし雨と言う技でスクアーロに勝った。スクアーロを助けようとしたが、スクアーロは鯨に襲われてしまった。

「うそ。」

後味の悪い戦い。山本は悔しそうにしていた。

## 僕の本音

雨紗が山本武のバトルを見に来ていた。回りくどい事しないで一気に咬み殺せばいいのに。なんて僕は見ながら考えていた。

「ヒバリ。」

「今度は獄寺隼人が何の用だい？」

「…山本が変な事言いやがらなかったか？」

相変わらず変な日本語。そういえば、イタリアの生活長いんだっけ。

「山本武が言った言葉なんて忘れたよ。」

わざわざ応接室まで来て、獄寺隼人は僕に咬み殺して欲しくてたまらないらしい。

山本武みたいに僕から離れてもないし、ただのバカとしか思えないよね。

「ああそうかよ！聞いた俺がバカだったぜ。」

「へえ。分かってるんだ？」

本当は気付いてる。獄寺隼人がわざわざ僕に会いに来たホントの理由になんて。

「山本武も君も…。雨紗が好きなら本人に言えばいい。」

「なっ…！？別に好きとは言ってねえだろ！」

「自分の顔鏡で見たら？」

「は？」

「夕焼けみたいに真っ赤だよ。」

獄寺隼人は僕の胸ぐらを掴もうとしたけど、軽く避けといた。

「テメエの余裕な顔イライラするんだよ！」

「クスッ。僕は君の事なんてなんとも思わないよ。」

獄寺隼人が走って応接室を出ていった。

パタン

「余裕が無くても…僕は弱みなんて見せないよ。」

拳を握りしめ、呟いていた。

## 抜け駆け

俺はスクアーロに勝った。勝てたら気持ちを伝えようと思ってたけど、獄寺には伝えといた方がいいのかよく分からないのな。

梶平の家の前に立つてると、玄関から梶平が出て来た。

「あれ？ツナんちに来たの？」

ツナの家は隣だから勘違いしてるみたいだ。

「今日は梶平に会いに来たのな。」

「珍しいね。あ、私コンビニ行きたいんだけど。」

「じゃあ歩きながら聞いてくれるか？」

「山本がそれでいいなら。」

急に緊張してきた。手汗がじわじわ出て来てさりげなくズボンで拭く。



「あのな。」

梶平を見ると、シンプルな白のロンTに紺色の七分のスキニーパンツを来ていた。

髪型はサイドにまとめていて、ピンクのシュシュだっけな…ソレがフリフリして似合っていた。

「山本？」

「そのシュシュ似合ってるのな。」

「そう？」

梶平の可愛さを中の下とか言ってる奴らもいるけど、俺にはもう世界一可愛く見える。

「梶平。」

「今日の山本変だよ？」

「俺…、梶平が好きだ。」

時間が止まってるみたいに梶平は黙っていた。

「…。」

「シカトはひどいな。」

苦笑いして見せると梶平はゆっくり口を開いた。

「私が恭弥と付き合ってるの知ってるよね？なのに、告白するとか山本が分かんないよ。」

「彼氏がいても好きなのは好きなのな。それがズルくても卑怯でも梶平に少しでも男としてもらえるなら俺は気持ちを伝える。」

このまま嫌われてもしょうがない。

「ん？野球バカにアホウサギじゃねえか。」

バットタイミングとはこの事だ。

「あ…獄寺。」

「そのホツとした顔俺には見せた事ない…よな。」

「二人でどこ行きやがる！十代目の家に行くぞ野球バカ！」

空気の読めない獄寺。

「獄寺、俺…梶平に気持ち伝えたから。」

「え…？」

「じゃ、俺は帰るのな！」

もしかしたら、俺が去った後に獄寺が気持ちを伝えるかもしれない。

「山本の気持ち嬉しかったよ！」

振り向いたら梶平が不器用に笑ってた。

「梶平を好きになって良かったのな。」

わりとスッキリした自分に安心していた。

好きになりやがれ

山本が気持ち伝えたとか言いやがるからこんな空気になったじゃねえか。

「…獄寺はツナんちに行くの？」

ドキッ！

「いきなりしゃべってんじゃねえ！」

ドクンドクン…

「はいはいすみませんでしたね。そういえば獄寺って好きな人いるの？」

タバコ…とりあえずタバコ吸わねえと落ち着かねえ。

「ふうー…。好きなヤツは、十代目に決まってるだろー！！！」

「へえ。ツナが好きなんだ。」

3歩下がるアホウサギ。俺は二歩詰め寄った。

「言つとくがそんなやましい思いじゃねえからな。」

「近い近い！そんな怖い顔でよないで。」

「ちっ！」

「あ！コンビニ行くんだった。」

アホウサギは走ってった。

「俺を好きになりやがれ。バカ。」

告白なんてできねえ。そんな簡単な思いじゃねえんだよ。

## パイナップルヘア

次の守護者は誰か分からないってツナが言ってたけど。

集合の体育館に言ってみたら、ツナがパイナップルヘアの女の子にキスされていた。あ、ほっぺたね。

「ちょ…、山本！誰あれ！」

「梶平遅刻なのな。クローム髑髏とか言ってたぜ。」

「どくろ？」

そんな事を話してるうちに試合は始まっていた。

何がおこってるの？

ゲームとかでしか見た事のない光景が目の前にあって夢の中にもいるみたい。

「あれは触手だっけ？」

「アホウサギ黙って見てやがれ。」

「…すいません。」

獄寺に睨まれ、黙っているとリボンちゃんが隣に来た。

「クロームがライバルになるかもしれねえな。」  
「え？」

ニヒルに笑うリボンが言ってる意味がまだ分からないでいた。

結局クロームちゃんが骸になって、骸がいないとクロームちゃんは生きていけなくて。

結果は骸が勝ったけど、衝撃的な光景ばかりで頭の整理ができない。

「雨紗。」

「恭弥！」



帰り道恭弥と会った。

「これ以上沢田綱吉に関わるな。」

「え？」

まだまだ波乱の予感。

厳しい眼差し

昨日の恭弥怖かった。

今まで付き合ってたて怖いと思ったことなかったのに、恭弥のかもしれない。雰囲気は違ってた。

「電話して聞こうかな。」

コンコン…

ドアからでなく、窓の外からノックが聞こえた。

「恭弥？」

カーテンを開けると恭弥が屋根に片足立てて座っていた。

ガラガラ…

窓を開けると背中を向けて座ってた恭弥が振り向いた。

「何見てるの？」

「雨降るかなって思ってたね。」

「そう?。」

「雨紗もおいで?。」

「ん。。。」

屋根に座ったら汚ないと思ってたら、恭弥が学ランを敷いてくれた。

「僕が雨紗を危険な目にあわせたくないって言うたら笑うかい?。」

「恭弥らしくないけど、嬉しい。」

キュッと繋がれた手。

「けどね、私恭弥のそばにいたいのに。」

「許さないよ。」

「え?。」

言葉とは反対に恭弥にキスをされ、びっくりしていると恭弥は笑った。

「雨紗は僕の彼女なんだからね。」

星はあまり見えない空だったけど、心が熱くて幸せな夜だった。

## 山本と獄寺

タバコが切れたから買いに行く事にした。これだから一人暮らしは不便だ。

ま、気楽で良いけどよ。

「お、獄寺。」

「野球バカ何してやる。」

道端で野球バカとバッタリ会ってしまった。

「チッ。」

「獄寺は伝えたのか？」

「男がんな話してんじゃねえよ。」

睨みつけても怯まないこの能天気な面。ムカつくんだよ。

「ははっ。ツナんち行くんだけど、獄寺もか？」

「俺は後から行く。野球バカには関係ねえだろ！」

俺は走った。告白できない自分が嫌で自分から逃げてるようだった。

「俺がバカだ。」

それは俺が一番分かってる。

## 背後から一撃

私は普通に下校していた。

ガッ！

背後から頭に激痛が。私は前にフラついた。

「避けるよ。」

「明！？」

「安心しろ急所は外した。」

赤髪の明がカツコ付けながら言った。

「頭ガンガンするんだけど！下手くそ。」

「避けねえから悪いんだよ！鏡の前でちゃんと形やってるか？」

「やってるけど気配とかを感じる為の修行してないもん。」

ヤレヤレと手を横に挙げながら明は歩いてった。

アイツ。何がしたいのか全く分からない。

「恭弥のガールフレンドじゃねえか！」

「デイーノさんこんにちは。」

今日は一人みたいだけど…あ。やっぱり怪我してる。

「恭弥に何か言われたか？」

「え？」

「恭弥は愛情表現下手だろ？ソコが可愛いかったりすんだけどな！」

「なんか…デイーノさん恭弥の元カノみたい。」



ガンッ  
分かりやすくショックを受けるディーンさんを残して家に帰ったの  
だった。

## ヒバリの条件

リボーンとヒバリは応接室にいた。

「赤ん坊はまるで僕の気持ちが見えるみたいだね。」

「いや。ヒバリは読みづらいぞ。」

リボーンはエスプレッソを飲みながらニヤリと笑った。

「僕、雨紗が見に来るなら戦わないから。」

「何でそんなに嫌がるんだ？」

「雨紗がいたら雨紗を守ること必死になるからさ。」

リボーンは眉を潜めた。

「ヒバリ。ホントに変わっちゃったのか？」

「変わった？まさか。これが僕なのさ。」

一匹狼で誰も信用しないヒバリが一人の女を守るなんて。おかしい。おかしすぎるぞ。

「もし、雨紗を見つけたら戦いを辞退する。ってことでいいかい？」

「ダメだと言っても聞かないだろ？」

「クスッ。それはどうかな。」

さてと、ヒバリの戦いの日。雨紗をどうやって学校から遠ざけるか。

考えるだけで面白くなってきた。

そうだ。ツナにはまだ秘密にしておくか。

## 試合と戦い

試合と戦いつてやっぱり違うのだろうか？

試合なら見ている側に危険はほぼないけど、戦いは……？ひょっとしたら応援側まで何かが飛んで来たりするかも知れない。

今までの戦いは何もなかったけど、恭弥に関わるなって言われてから気付いた。

私は危険な場所にいたんだってことに。

それとも恭弥にとって私は邪魔なのかな？ただむなしくて涙も出ない。

君がいるだけで力になるよ

言っただけだった。そばにいてほしいって言葉が欲しかった。

恭弥の戦いに行くべきか行かないべきか。

「アホウサギ。」

家を出ると獄寺に会った。ツナの家に寄ったのだろう。

「何よ。地獄寺。」

「今夜の戦いは見に来るんじゃないねえ。」

睨みつけられるのに慣れてるはずなのに、一歩引いてしまった。

「何で獄寺に言われなきゃなんないのよ。」

「ヒバリが…」

「獄寺くん！言っちゃダメだ！」

ツナが走って来た。

「ツナ？何事？」

「雨紗ちゃんはヒバリさんから聞いてるはず。俺たちが入る話じゃ

ないよ。」

「すみません十代目。」

「なによ。みんなして！私がそんなに邪魔？」

あふれた言葉がそれだった。

「ウサギ。子供みてえなこと言ってんじゃないぞ。今夜のヒバリは本気なんだ。」

リボンちゃんの言葉に私は黙った。

「分かってるよ。」

今優先すべきことは恭弥の気持ちなんだ。

## 本音と建て前

雨紗を守りたいんだ。

それが言えない僕はまだ恋なんてする資格ないんだ。情けない姿を見せたくないとか、気が散って仕方ないとか。そんなんじゃない。

気まぐれな僕が好きになった君だから、だから沢田綱吉とかと関わっていく僕を見て欲しくないんだ。

そう、ただの我が儘だよ。

トンファーを磨いていると、携帯が鳴った。

「はい。」

《恭弥：、今日は応援には行かないけど負けないでね。》

「ワオ。怪我しないでとは言わないのかい？」

《死なないでね。》

「うん。終わったら電話するよ。」

携帯を閉じて、ホッと安心した。

「これで存分に咬み殺せる。」

今の僕はただの血に飢えた野獣。誰にも止められない。



## 最後の守護者

ここは並盛中。

「いいかてめーら！！何が何でも勝つぜ！！」

銀髪の生意気そうな男が気合を入れていた。

「おい。何言つてんだ？戦うのヒバリだぜ。」

右目を痛々しく包帯でぐるぐる巻きにした山本がしゃべった。

「お前がいきりたつてどうするのだ？」

今度は短髪の独特な話し方の男だ。

「んなこたわーってんだよ！！十代目は俺らを信頼して留守にしているんだ。俺らの目の前で黒星を喫するわけにはいかねえだろーが！！」

ふうん。アイツかけーじゃん。

「ねえ。君何してるんだい？」

背後から雲雀の声がした。やべえ！これじゃ雨紗との約束のブツを貰えなくなる。

「散歩してただけだよ！」

「ワオ。誰かと思ったら赤毛の猿じゃないか。今は金髪かい？似合わないね。」

「うるせえ！早く仲間んとこ行け！」

「仲間？そんなものいないよ。」

踵を返して雲雀は山本たちの場所に…。

「あれ？明じゃねーか。」

「知り合いなのか？」

「関係者以外入れねーはずだ！」

「山本？奇遇だな。じゃ、俺はここで！」

俺は雨紗にビデオで雲雀の戦いを撮るよう頼まれた。もちろん、俺の欲しいモノ一つ貰えるという条件で。

アイツらをつけた。

「そうか。あれを咬み殺せばいいんだ。」

けっ。キザな野郎だぜ。あれ…？

「んだよあれ。」

ロボットみたいな巨大な物体が見えた。

「貴方。早くここから出なさい。」

色黒の二人のねえちゃんに見つかった。やべえ。

「そついや赤ん坊からこの手紙を預かったんだ。」

山本が近付いて来た。そしてねえちゃんが手紙を読む。

「許可します。ただし、ここから動いたらすぐに去ってもらいます。」

「は？」

「良かったな！」

山本の胡散臭い笑顔を久しぶりに見た。

「いいからお前あっち行けよ。シッシッ。」

「あはは。…邪魔すんなよ？」

「お前がな！」

てか、ビデオに入んなったの！俺はピントを雲雀に合わせた。

「負けんな雲雀。」

なんて呟きながら。

## 猿山のボス

ヒバリはゴーラ・モスカとか言うヤツを一瞬で倒した。

が。すぐにザンザスと言う男に向かって行きやがった。

「サル山のボス猿を倒さないと帰れないな。」

ヒバリは指輪なんて興味ないと審判の女に渡しやがった。めっちゃくちゃな野郎だぜ！

「まだだ。」

金髪の明ってヤツが呟いたのに気付いた。

「野球バカの知り合いが何か言ってるぜ。」

「明どうしたのな？」

「モスカってヤツまた動き出す。」

俺たちはコイツの言うことなんか聞いてなかった。

10分後にモスカが暴走し出すまでは。

## 野獣VS野獣

ガッ…！

ザンザスの蹴りを雲雀がトンファーで受け止めた。すかさずバクテンして着地するザンザス。

「足が滑った。」

「だろうね。」

俺は二人をカメラごしでなく自分の目で見たくて仕方なくなってきた。

「そのガラクタを回収しに來ただけだ。俺達の負けだ。」

「ふうん。そういう顔には見えないよ。」

今度は雲雀が仕掛けてる。トンファーが目にも止まらぬ早さでザンザスを襲った。



「ヒバリのヤツ何をしとる！！機械仕掛けに勝ったと言っのに！！」

短髪の男が言うのも頷けるけど、ヒバリの気持ちがよく分かる。

ヒバリはザンザスの手を弾いた。

「手…出てるよ？」

が、それはザンザスの思惑通りだった。モスカとか言うロボットみたいなヤツが雲雀の足を撃った。

やっぱりあのロボットまだ動き出すぜ。

「って！俺も危ねえし！」

山本たちが伏せてたから俺もすかさず伏せた。すると、救世主が現れた。

沢田綱吉。雨紗の幼なじみが、助けてくれた。

その隙に…

そして雨紗の家。

「ええ！？途中で抜けて来たの！？」

「雲雀の戦いは撮ってやったんだから良いだろ？つか、あれ以上あの場にいたら死ぬから！」

「ん…。ありがと。そういえば何が欲しい？」

「俺さ、カメラマンでいいからこれからも山本たちの戦い見たいんだ！」

「安い頼みだね。リボンちゃんに聞いてみるよ。」

あの興奮は忘れられない。まるで映画みたいな…。いや、映画より迫力あった。今夜は目がさえそうだ。

## 連絡

明が撮ってくれた恭弥の戦いを観ていた。明の声がうるさくてちょっとイライラしたけど、なんとか恭弥の戦いに入り込めた。

「恭弥ってばイキイキしてるなあ。」

バトルマニアって分かってるけど妬いてしまう。

ちょうど電話が掛かって来た。

「恭弥だ。」

ピッ

《雨紗…。》

「お疲れさま。元気ないけど大丈夫？」

《まだ戦いは終わってないからね。それより、赤毛が金髪になって

たよ。》

恭弥が明のことを気にしてるのがおかしくて笑ってしまった。

「待つて。戦いは終わってないってどういつこと？」

《詳しいことには興味ないよ。僕はあのボス猿を咬み殺せば充分さ。》

ゾクつと背筋が凍った。

「私も見たいなあ。」

《今回より危険だから来たらダメだよ。もし我慢できたら雨紗に褒美をあげようかな。》

「じほつび？」

《クスッ。ま、期待しててよ。》

キスとか？

きゃー！！

一人盛り上がっているのだった。

好きだから。

あの恭弥がごほつびをくれるって言うてくれた。

でも、恭弥の戦いを見たい。

でもでも！

ごほつびが欲しい！！

「あの銀髪が言う通りにアホだ。」

「うわっ！明いつからいた？」

「雨紗が『いやん。恭弥のごほつびほっしいーん』て言うてたあたりから。」

明の頭を叩いたらニヤニヤされた。

「何よ！私そんな変な声出してなかったはず！」

「あの雲雀のコトだから、褒美って生首じゃね？」

「な…生首いいい！？」

恭弥がザンザスの生首を持って不適な笑みを浮かべる姿を想像して  
しまった。

「ヤバい。似合いすぎる。」

「オイオイ、喜ぶなよ。」

そう言いながら、明は部屋を出てった。

「やっぱ見たい！」

「ダメだよ。」

「恭弥！？」

「ちょっと息抜きに来てみたんだけど、浮気と見なすよ?。」

明が部屋から出るのを見てる間に部屋に入ったらしき私の彼氏。

「好きだから見たいの。」

「…ふうん。ごほうびあげないよ?。」

「う……。」

「じゃ、戦いが終わったらまた電話する。」

と優しく頭を撫でられれば何も言えなくなるよ。

恭弥のばか。



## カメラマンの後ろで

「おう。雨紗も来たのか。」

「しーっ！私は透明人間なんだから。」

結局来てしまった。明から少し離れた木の影で様子を伺う事にした。

「あれ？みんなが腕にしてるのって何？」

「あれには毒張りが仕込まれてたんだ。リングを取らないと毒が…」

明の説明が耳から入らない。毒…？何言ってるの。頭が真っ白になっていると恭弥が見えた。

「き…」

「見つかるとヤバいんじゃないの？」

ガンガンガンガン…

ポールらしきモノをトンファーでがむしゃらに殴ってる。

「あれ、何してんの？」

「確かポールを倒せば毒が抜けるんじゃないかったか？」

「いや、そこちゃんと聞こうよ！」

思わず手付きでツツコミを入れてしまう私。

「だってリボーンにここからならギリギリオッケーだって言われたんだもん。」

「もーん。じゃないでしょ！…あれ？ポール倒されてる。恭弥がいない！」

「行くな。てか、もう帰れ。」

「うつさいなあ。明の癖に生意気すぎ！」

イライラして言うと明は真顔になった。

「雲雀に嫌われてもいいのか？」

「明に関係ないでしょ！」

私は恭弥を探すことにした。

## 雲雀の想い

僕はポールめがけてトンファーを振っていた。だんだんと薄れゆく頭を覚ますためにあのボス猿を思い出しながら。

「くっ……！しつこいんだよ君は！」

ポールに独り言なんて言っている自分が可笑しくて、自我が壊れそうになった。

そんなとき雨紗を思い出したんだ。

「僕が死んだらご褒美をあげられないよね。」

僕が毒なんかには負けるわけない。あの王子気取りの天才にも興味があるし。

もう少し。

もう少しだ。

もう少しで倒せる！

ポールが倒れるのを見て、力が抜けそうになるのを踏みとどめた。

「獄寺隼人はどこだい？」

助けてあげようとか考えてるわけない。全てバトルの為。

まだまだ戦える。

自分の体に言い聞かせた。

行く手を阻むモノ

あ！恭弥だ！

走って恭弥に駆け寄ったはずが、誰かに口を塞がれた。

「むぐっ（誰）？」

「こっから先は行かせないのな。」

語尾に星マークが付きそうなテンションで山本は私から手をはなした。

「何で邪魔するの？」

「んー、梶平を見つけたらヒバリが崩れ落ちそうだから。」

「え？」

「今のヒバリは必死に精神を強く保ってるのな。俺もこっに見えて結

構しんどいんだぜ？」

確かに額の汗がすごい。

「でも、力になりたい。」

「もう梶平はヒバリにとって力になる存在だと思っただけだな。」

そんなの本人にしか分かんないよ。

私はその場を動けずにいた。

## 王子 vs 委員長

この距離からだだとズームすればギリギリ見える。雲雀が王冠頭にのせたヤツと戦おうとしている！

俺は二人にカメラのピントを合わせた。

「あれ…獄寺もいる。」

俺は獄寺に興味がない。ゆえに入らなくていいよな。

凄い数のナイフが宙に浮いてる。けど並べてる感じだからワイヤーが何か入れてるっぽい。

雲雀は体当たりでナイフを受け止めた。

「声が聞き取れないのがなあ。」

けど楽しそうにしてんな。



あれ？あの走りは。

「雨紗じゃん。ダメって言ったのに。」

けど、獄寺に止められていた。

へえ。獄寺って雨紗の事好きっぽいな。

いらん情報を仕入れてしまった。それより…、って終わってるし！

王冠のヤツ逃げとるし！

さあて次は誰を撮そうかな。

## 目の前の事情

恭弥を見つけて走っていたら、獄寺にとっせんばされた。

「なに？退いてよ！」

「嫌だ。アホウサギ…てめえヒバリの邪魔をする気か？」

「邪魔じゃないもん。」

だんだんと自信がなくなって声が小さくなる。

「あのカメラ野郎と帰りやがれ！」

ドンっ…と突き飛ばされて挫折そうになった。その時、恭弥と戦っている王冠を頭につけた男と目があつた気がした。彼は目を隠していたから気のせいかもしれない。

「へえ。その女って…」

「ワオ。よそ見してる暇があるのかい？」

恭弥がナイフを受け止めた。

「ウサギ。今のうちに帰りやがれ！」

「…分かった。」

私は明のところに帰って明を引っ張って学校を後にした。

今はあの場所にはいけない。

私でも分かったよ。

## オシオキ決定

あーあ。やっぱり雨紗は僕の言う事が聞けないんだね。

刺激的なご褒美あげようと思ってたのに…予定変更だよ。

獄寺に借りを返したし。沢田綱吉がボス猿を凍らせて、ボスはなかなか自分で自滅した。

他の奴らが逃げようとしたから

「逃がさない」

「ねえ、決着つけようよ?」

「行かせんぞ。」

と言っふくに道をふさいだ。

今もリングとか興味ないよ。それよりもこんなに疲れてるのに、雨紗に会いに行きたい。

僕は雨紗の家の屋根に着くなり眠ってしまった。

「恭弥!？」

「ん…。痛い。」

窓の段差で腰を打ったらしく、起きるなり顔を歪めてしまった。

「お疲れさま。頑張ったらしいね!」

「オシオキしなきゃね。けど、今の僕にはオシオキもご褒美も同じかもしれない。」

「へ?」

力強く抱きしめた。きっと雨紗は痛いはず。

「頑張ったね。」

「…別に僕は普通に噛み殺しただけだよ。」

「恭弥が照れてる!」

「じゃ、雨紗からキスしなよ。」

顔を覗くと、雨紗は頬を真っ赤に染めていた。

「ワオ。そんなに照れる事かい?」

ちゅっ  
…

「はい終わり!」

「小鳥みたいなキスじゃダメだよ。」

こんな身の毛もよだつようなカップルの会話、僕もするようになるなんてね。

意外と嬉しい…かな。

## ナイトメア

「いやあああー!」

隣の家からのバカデカい叫び声で目が覚めた。アレは間違いなく雨紗ちゃんの声だ。俺は目を擦りながらベッドから降り…ようとした。

ミシッ…

床に着地せず、ヒモらしきモノを踏んでしまった。

忍者屋敷のようにリボーンの仕掛けが次々と天井を伝って行く。

「ぎゃあああー!」

今度は俺が叫び気絶した。

次の日。



ドガッ！

「うえっ…。」

目覚めるより先にリボーンの飛び蹴りが来た。

「やっぱりお前はダメツナだな。」

「あの仕掛けまだやってたのかよ！」

「あれも修行だ。」

じゃなくて、雨紗ちゃん無事かな。

「おはようございます十代目！」

「獄寺くんおはよう。」

窓から顔を出して隣の雨紗ちゃんちを見ると、俺の家の前で待ってた獄寺くんの声がした。

「あ…雨紗ちゃんが出て来た。」

俺はかなりの速さで着替えてパンをかじり、家を出た。

「さすが十代目！早かったスね！」

「それより雨紗ちゃんは？」

「アホウサギならさつきから歩いてるはずなのに全然進んでないみたいです。あれ、ギャグすかね？」

「雨紗ちゃん！」

トボトボ歩く雨紗ちゃんの肩に手をかけたら、ふらついた。どんだけだよ！

「あ…ツナか。」

「夕べ何かあった？」

「ん。私…恭弥に殺された。」

「何アホな事言ってやがる！」

獄寺くんが後ろから雨紗ちゃんを罵ったから俺は軽く睨んどいた。

「もちろん夢でね。けど、リアルすぎてもう…！」

「ちょうどいい機会だ。ヒバリと距離をとれ。」

「よっ！」

現れた山本の肩に乗るリボン。

「ヒバリから離れたら俺がついてるからな！」

「山本朝から軽いよ。」

雨紗ちゃんがウンザリしていた。

「けど、人が死ぬ夢はその人を気にしてるって言っし。ね！」

我ながら素晴らしいフォーローだ。

「じゃあ、アホウサギは自分が気になる…つまりナルシッてことスか？」

「獄寺のがナルシスト過ぎるナルシじゃん！」

「いや、意味分かんないから！」

「そういう事だ。後は山本に頼んだぞ。」

「おう。」

グロテスクな夢を見たら…ファンシーな絵本を読むべし！としばらくして雨紗ちゃんも熱弁し出した。

トンファー

ここは応接室。

「ねえ、恭弥。」

「なんだい？」

トンファーを磨く恭弥。私は恭弥の隣に座っている。

「トンファーってどこに隠してるの？」

「どこだと思ukai？」

背中？懐も捨てがたい。

「組み立て式？」

「クスッ。気分によって変わるかな。」

「トンファー何個持ってたの？」

資料を入れている本棚の引き出しの鍵を開けて、引き出しを引いた。

「5つ？」

「家にはまだまだあるけどね。基本はこれでいいから。」

磨いてたトンファーを構えた。

「学ランにトンファー。ここまでスピアあると彼女もスピアがいるか心配だよ。」

「ゴホッ……まさか。」

恭弥が動揺したー！！意外な一面でした。

## マドンナと灰被り

京子はいつもキラキラしてる。あの可愛い笑顔で癒されないモノはないだろう。

「雨紗？」

「わ！」

京子がアップになって動揺した。

「あんた男みたいね。沢田みたい。」

「私は女ですう。」

京子に生まれてたら世界が変わったかもなあ。

「おい！アホウサギ。」

「…。」

「アホウサギ！」

「でさ、京子の笑顔は世界を明るくする力があるの。」

獄寺をシカトしていたら胸ぐらを掴まれた。

「いいから来やがれ。」

「うう。やっぱ私男かも…。」

「雨紗ちゃん頑張つて！」

「京子フォローになってないわよ。」

トボトボ獄寺の後を歩く私。

「ねえ、どこ行くの？」

「いいから来い。」



「歩くの速いよ！ぶっ…！」

いきなり獄寺が止まり背中に顔面をぶつけた。なんか、香水の匂いと煙草の臭いがする。中学生が生意気に。

「ちゃおッス！」

「リボンちゃん！また来たの？ダメじゃない赤ちゃんが来ちゃ。」

「リボンさんに失礼な事言ってんじゃねえ！」

獄寺が噛み付いて来そうだったから黙った。

「京子が太陽なら今のお前は灰だ。」

「…っええ！？」

「ぶーっ！灰だつてよ！」

「獄寺くん？」

爆笑中の獄寺の背後にツナが立っていた。

「まさか雨紗ちゃんを笑ってないよね？」

「ツナ、ありがと。大丈夫だよ。」

「すみません！十代目！！」

リボンがフンツと鼻で笑った。

「灰が笑われたら鼻息で飛ばされるぞ。」

「リボンちゃんそれ面白い！」

上手くまとめられたのだった。

## 満月の夜に

今日は満月。部屋の電気を暗くして空を見ようとしたら、ツナ部屋から光が漏れてよく見えない。

反対のカーテンを開けたら…。

ガララ

「狼男！」

「誰が狼男だ！」

「狼ストーカー獄寺！」

獄寺が塀を登って屋根まで登ろうとしたら誰かにバランスを崩された。

「やあ。こんな夜は雨紗に会いたくなってね。」

「恭弥！」

恭弥は部屋まで入って来た。

「このまま狼になっていいのかい？」

ドキドキ…

「お願いします！」

可哀想な獄寺は地味に腰を打ち、隣の塀を跨ぐうとしていた。

「ランボさんとーじょー！」

「わっ！アホ牛どきやがれ！！」

今度はランボに邪魔をされた。

「獄寺くん何してるのー！？」

「十代目！団子持って来たっス！」

「え？」

「満月には団子ですよね！」

ツナには従順な獄寺の良さに気付いて欲しい。

## 必殺技

ツナの必殺技はまだ見た事ない。山本は剣を使った『五月雨』とか。獄寺はダイナマイト。

ディーノさんはムチのヤツ。

恭弥はトンファーだね。

必殺技が欲しいと切実に思う今日この頃。

「ワオ。まさか戦いたいと言わないよね？」

ここは応接室。

恭弥は風紀委員の仕事を隣でしている。

「うーん。護身用って言うか。」

「へえ。もしかして弟子入りしたいわけ？」

ギランと恭弥の目が光った。

「うっん。私だけの必殺技が欲しいの。」

「もう僕は雨紗の必殺技を知ってるよ？」

「うそ！何！？」

「キラースマイル。」

ヒュー…

今、隙間風が吹き抜けたよ。

「もういい！」

私は応接室を後にした。

「本当なのにな。草壁？」

「はい！委員長。」

草壁はどこまで二人の会話を聞いていたのだろうか。返事が遅れたらメッタ打ちだから必死な草壁だった。



逆ナン

獄寺隼人は商店街を歩いていた。

「あの一。」

「言っちゃいなよ。」

二人の女子高生が獄寺を狙って話しかけて来た。

「ああ？」

「なんでもありません！」

「すみませんでしたあ！」

そして逃げて行かれるのだ。

山本武は通学路を歩いていた。

「君ー。」

綺麗なお姉さんに声をかけられ振り向く。

「俺っすか？」

「やっぱりかわいいー！」

ポリポリと頭をかく山本。

「メアド交換して？」

「いいすよ。」

うえええー！ー！？

いいのか？それでいいのか山本お！

ピロリロリン

「メールするね！」

「はい。」

お姉さまが去った後、山本は携帯を見た。

【一件削除】

ピッ…

「あーあ。断らねーとな。」

一番酷いパターンだ。

ツナは駅の前を走っていた。

「あれー？ランボどこ行ったんだよ。」

「あの一。」

「え…。俺？」

ツナは他校の女子中学生に声をかけられた。

「足どけてもらえます?」

ツナはハンカチを踏んでいた。

「わあ!ごめんなさい。」

はらいながら渡すツナ。

「どんくさいやつ。」

ガーンっ

そして雲雀恭弥は見回りしていた。

目があう女子に目をそらされる雲雀。

「恭弥あ!」

「雨紗！」

はしっ

抱きしめ合う二人。

「そろそろ終わりにしねーと…」

リボーンにより強制終了。

好きとか嫌いとか

好きとか嫌いとか評価されるのはまだいい。どうでもいいなんて言われたらもうショックの何者でもない。

「どうでもいい…て。」

「うるせえ。お前がはつきり言いやがれ。」

獄寺フアンクラブの子に私の事どう思うか聞いてと頼まれ今に至る。

「だから、あの子の事どう思ってるの?」

「話した事もねえヤツなんか知らねえって言ってるだろ。」

「最初からそう言ってよ。これからはどうでもいいなんて言っちゃダメだからね!」

「けっ。」

自分で聞けないあの子も悪いけど聞き入れた私が一番悪い。

「獄寺。」

「あ？」

「好きとか嫌いとかめんどくさいね。」

「俺は…大切だと思うぜ。って何言わせてんだ！アホウサギ！」

そんな赤面獄寺でした。

## ヒバードと私

応接室に来たら、恭弥の変わりにソファーにヒバードが眠っていた。

「ヒバード…。」

よく眠ってる。恭弥の肩にいるのを見ると憎たらしいけどこうして見ると可愛いものだな。

「やあ。」

恭弥が音もなく後ろに立っていた。

「わあああ！びっくりした。」

「クスッ。そんなに見つめて。ヒバードを食べたらダメだよ。」

「食べないもん！」



ヒバリ。ヒバリ。

ヒバードは恭弥の肩に乗った。

「やっぱり丸焼きに……。」

「雨紗？何か言ったかい？」

「いいえ！」

ヤキモチはほどほどに。

## ネクタイ

学ランもらって贅沢だとは思っよ？けどけど！

「ネクタイ欲しいな。」

「僕はまだ卒業しないよ。」

「せっかく付き合ってたから交換とかしたいんだもん。」

恭弥は資料に目を戻した。

「ワオ。僕にリボンをしろって言いたいのかい？」

「無理だよな。女子もネクタイなら良かったのに。」

カリカリカリ

恭弥は風紀委員の仕事をしてる。

「はい。棚に直して。」

「ん。」

ちよつとは役に立ってるかな。

「残念ながらネクタイのスペアは少ないからね。」

「ベルトならあるけど。」

「ベルト!?!」

「やっぱりあげない。」

私の鼻息が荒すぎたらしい。恭弥は冷めた目をした。

「いい子にしたらあげてもいいよ。」

「恭弥大好き!」

「うん。」

彼氏のモノって特別な感じがする。けど、恭弥はモノに執着はないのかな。

「鉛筆あげる。」

「やったー!」

そう。彼女って彼氏のファン1号なんだよ。

## 最近のボム

好きじゃねえよ。

そんなの認めるわけねえ。

教室で寝てたら頭を叩かれた。

「掃除時間だから。獄寺邪魔！」

「ってえ！このアホウサギ！！」

十代目が後ろで笑ってらっしゃる。そう。あれはアホウサギをイジめるなど言ってんだ。

「く。」

「早くどいて。」

「けっ。」

立ち上がってどこうとしたらアホウサギの手と俺の手が当たった。

「いたつ。」

ドキン

って馬鹿か！ドキンじゃねえだろ俺！

「獄寺の手硬いよ。」

「は？硬いとか言っな！」

「獄寺くん何を想像してるの？」

「十代目！さようなら！」

俺はヘタレじゃねえ。教室を出てすぐ煙草に火をつけた。

「こら！獄寺！」

「ああ？」

教師に見つかった。すぐ目をそらされたけどな。

十代目大好きです。

## 山本ペース

最近存在感が無い山本くん。学校では人気者だ。

「あのー。山本くんと同じクラスだよね？」

「違います。」

私はよく嘘をつきます。もちろんめんどくさいから。

「梶平。」

「山本くん！」

「ん？誰だっけ。」

うんうん。人気者は大変そうだ。

「今日は梶平とデートだから。」



「は？」

「彼女だったの？」

「悪いな。」

その子はいなくなつた。私は山本の胸ぐらを掴んだ。

「どういう意味だい？」

「ははっ！ヒバリとキャラ被ってるのな。」

「私を利用しないでくれる？」

「じゃあ、デートしようぜ。」

「…………。いや、しないから。」

私には山本のキラキラ光線はききません。恭弥だけだからね。

ツナまよまよ

たまにサンドウィッチのツナマヨが食べたくなる。

学校でツナがツナマヨを食べていた。

「共食い!?!」

お昼に共食いと叫んだ私。吹き出す者多数。

「アホウサギ!十代目にほんと…失礼なことやってんじゃねえ!」

「獄寺ほんとの事って言おうとしたのな!」

「別にいいよ。慣れてるしね。」

テンションの低いツナマヨ。

「ツナマヨ!」

「雨紗ちゃんわざと?」

「ごめん。今は本気で間違った。」

「ウサギが…。」

ツナに生まれて初めてウサギと言われた瞬間でした。

ツナまよ！

「作者のネタに付き合わなくていいよ。」

「恭弥いつの間に！」

「一緒に食べよう。」

「うん！」

呼びに来た恭弥でした。

## サドとマゾ

今日は暇だからサドとマゾにわかる事にした。

まず、ツナ。

「ツナまよとは言わせないよ。」

「キミはサドだね。」

「は？」

京子に対してはマゾっぽいけど他へはサド。

「お兄ちゃんがね。」

「キミはサドだ！」

「へ？」

京子は優しいけど図星をばんばん言っあたりサド。

次は…

「見てんじゃねえよ！」

「獄寺はマゾだ！」

「アホウサギ。頭おかしいんじゃないか？」

コイツはかなりのマゾと来た。ツナに対しての態度ですぐ分かる。

「そしてお前は…サマだ！」

「サマ？ 梶平はおもしれーな。」

「サドあんどマゾでサマになる。」

バシン

頭を叩かれた。

「あんた自習中に何してんのよ。」

「コイツが一番サドだー！」

「はいはい。席に着きなさい。」

花により強制連行されました。

「雨紗はマゾだね。」

「恭弥。」

「クスクスッ。そういうのバカでいいよ。」

そして恋人からダメ出しされた。

背伸びして

平凡な私が恭弥と付き合つてて違和感がなくなるはずない。

「あー、ヒバリさんの彼女！」

と指をさされるのもしばしば。

「ブスじゃん。」

と言われるのも慣れてる。

付き合うつてことは辛いこともある。

「ブスカい？…僕の好みだから関係ないよね。」

シャキーン

恭弥がかばってくれるのは嬉しい。

嬉しいけど、認めてもらえない自分が情けない。

慌てて逃げてく恭弥に憧れてる生徒。

「慣れてるからいいよ。」

「慣れてる？雨紗らしくないね。」

眉を潜める恭弥を真っ直ぐ見た。

「でも恭弥が好きな気持ちは誰にも負けないからね。」

「雨紗…！」

「…邪魔なんスけど。」

山本の登場により恭弥は雨紗の手をつないだ。

「山本武。何サボってるの？」



「すみません。梶平は俺が連れてきます。」

これはまさしく…！

「逆ハ―…！」

結局、強制的に恭弥に連れてかれたのでした。

もしも…

もしも突然恭弥がいなくなったら…。最近なぜかそんな事ばかりが頭をよぎる。

「雨紗ちゃん？」

「なんだツナか。」

家が隣で同じ学校だから合うのは当たり前。

「ぼーっとしてたよ。何かあった？」

心配そうなツナの顔を見たら切なくなってきた。

「ツナもいなくなるでね？」

「俺は悲しそうな雨紗ちゃんを一人にしないよ。そうだ。久しぶりにゲームしない？」

ツナに腕を引かれツナんちに入った。

「あら、雨紗じゃない。ウチに上がるなんて珍しいわね。」

「ビアンキの家じゃないから!」

「雨紗さんこんにちは。」

ポテチを食べながら出てきたビアンキ。そしてフウ太くんがあいさつしてくれた。

「フウ太くんこんにちは。賑やかでいいね。」

「ツーくん。ちょっと買い物に行ってくるからよろしくね。雨紗ちゃんゆっくりしてってね!」

「分かったよ。」

「はい。ツナママ相変わらず若いですね!」

「まあ!冷蔵庫にプリン入ってるから食べてってね。」

ツナママ可愛い。

「ウサギも一緒か。」

「リボンちゃん。今日は学校に来なかったんだね。」

「午前中にヒバリに会ったぞ。元気なかったから叩いてやったら逆上してトンファー振り回してたけどな。」

「リボン何してんだよ!!」

「そっか。」

恭弥が元気ないから変なこと考えちゃうんだ私。

「ランボさんゲームしに来たじょ!」

「今日は雨紗ちゃんとやるからランボは見とけよ。」

「やだやだー!おれっちがやるー!!」

バタバタと暴れだしたランボ。

「私見てるだけでいいよ？」

「おまえらバカだな。交代ずつやればいいだろ。」

リボーンという言葉通り交代ずつやったのでした。

「ガハハー！ウサギ弱すぎだー！」

「ランボさん激しいね。」

「良かった。雨紗ちゃんが元気になって。」

声に出して言うツナでした。

## 彼が元気のない理由

雲雀恭弥が元気がない…と襲いかかるモノ多数。

「リボーン。どうしたんだよ！」

影からそれを見ていたツナとリボーン。

「お前が行け。」

ドカッ

ツナはリボーンに蹴り飛ばされた。運悪くチンピラの股間に頭をぶつけてしまった。

「つてー！！このやるー！」

「ひいいい！すいません！」

そいつ以外は滅多打ちに合っていた。

「沢田綱吉。邪魔しに来たのかい？」

「死神出たあ！」

「ぎゃああー！」

チンピラ1号は逃げてった。ちなみにチンピラは20号までいる。

「良かった。ヒバリさん元気ないと…ひっ！」

右耳をトンファーがかすめた。

「うるさい。早く僕の前から消えないと…本気で咬み殺すよ。」

「はいいいー！」

全力で逃げてリボンに飛び蹴りされたのは言うまでもない。

リボン×ヒバリ

「BLまがいのタイトルだぞ。」

「僕は知らないよ。」

ここは応接室。リボンがヒバリに会いに来た。エスプレッソを飲むリボン。

「僕に何の用だい？」

「弱くなつたな。」

カタン。

ヒバリはマグカップを置いた。

「うん。弱くなつたよ。」

しーん。

「オマエ本当にヒバリか？」



「分からない。最近咬み殺すことより雨紗とキスしたいとか抱きしめたいとか×××したいとか。咬み殺すより」「もういい。」

リボーンは応接室を後にした。

「今はダメツナの方がマシだな。」

こんな独り言を言ったとか。

## 鼻歌

ご存知の通り恭弥は並中が大好きだ。だから並中校歌もお気に入りらしい。

校歌を着つたにしてるし。

たまに、かすかに鼻歌を歌ってる時がある。

それはとても貴重。

ヒバードに教えてるところ見たかったなあ。

「さつきから視線が痛いんだけど。」

「かつこいいなって思ってた。」

「ウソだね。」

なんて言いながら嬉しそうな恭弥。

「私にも校歌教えて？」

「…。歌詞を全て覚えないうくら雨紗でも咬み殺すよ?」

「そうなの?」

「本当は義務付けたかったんだけどね。そしたら全校生徒を咬み殺すことになるでしょ?だから、風紀委員だけにしたよ。」

つまり風紀委員は校歌を全て正確に覚えていると言うことね。

「雨紗も覚えるかい?」

「んー…。まだいいや。」

「ヒバードも完璧じゃないからね。」

校歌を歌い始めた恭弥。

「うっ苦労さま。」

と自然に口にしていた。

## ツナゴク

「あれ？このタイトルおかしいよね。」

「手抜きっすね。リボンさんとヒバリのヤツと同じパターンをまたやろうってこんなんだ。」

「ん？」

ツナが何かに気付いた。

「どうしたんすか？十代目。」

獄寺の十代目の右腕になるための極意その1。

『十代目がいらっしゃる時は携帯を見ない』

「ねえ、これ落ちてたんだけど獄寺文字とか言うヤツじゃない？」

「わっ！なんでそんなところに！」

「何て書いてるの？」

ツナに逆らうことはできない獄寺は、極意を話し出した。

「もーいいや。」

「まだまだこれからが熱いんすよ！」

ツナは冷めた目を見せた。

「俺はもう冷めたよ。」

ガガーン

煙草に火をつけ心を落ち着かせる獄寺。

「あー！アホ寺だじょー！！」

「…。」

「雨紗に飴貰ったんだ！けど、アホ寺にはあーげない。」

「…チッ！」

シカトしきれない獄寺でした。

## 日常

暇だなあ。何もやることない。つてのは幸せなことだ。

「やっぱり好きだな。」

「他の子に言ったらすぐ付き合えるよ？山本。」

一週間前くらいから一日に一回告白されます。

「ははっ。いくら俺でも適当に告らねえよ。」

そのポーズ無いわ。ツナによくする助っ人登場ポーズみたいな。

「ねえ。山本は私が振り向かないから珍しいだけでしょ？」

「んー？梶平面白いからなのな。」

「面白って…私はお笑い芸人じゃないし。」



教室でこんな会話したら武ファンクラブから睨まれるしね。

「山本。雨紗ちゃんをからかわないでよ。」

「本気なのにな。」

冗談と思うことにした。

「俺も…きだからな。」

「ん？獄寺何か言った？」

「授業始まるぜ！」

獄寺が眼鏡をかけていた。インテリ獄寺。ちょっと似合っんだよね。

言わないけど。

あり得ねえんだよ

野球バカが最近アホウサギにす…好きなんて何度も言いやる。

スゲー嫌だ。

「獄寺くん？トイレの前で立ち止まってどうしたの。」

「十代目も入りますか？さ、先にどうぞ。」

「あ…うん。」

連れションをする中。

「獄寺くん元気ないけど何かあった？」

十代目が心配してくださっていた！  
テンション上がるぜ。

「いえ。野球バカがアホウサギに言い過ぎなんすよ。」

「ああ。山本は本気なんじゃないかな。」

ジャー

「本気…すか。」

手を洗いながら考えた。

キュッ…

「そんな簡単なんすかね。」

「え？」

「人の気持ちなんて伝えない方がいいんすよ。」

「…獄寺くん。」

男なら言葉はいらねえ。

そして始まる（前書き）

このお話で終わりになります。  
最後までお楽しみ下さい。

そして始まる

「え？終わっちゃうの！？」

「日常編だけらしいからな。骸のヤツなんか後半出てなかったぞ。」

「リボーンはいいのかよ！」

「さく…いや、大人の事情だからな。ダメツナがハイパー化して説得するか？」

現在ツナの部屋の中にいます。

「じゅーだいめ！」

「よ！ツナ。」

「二人に何て言えばいいんだよ！」

ガラガラ…

「雨紗の部屋と間違えたよ。」

「ヒバリさんまで来たー！」

こうしてツナはこの話で終わりと言う説明をした。

「ナメてるね。」

「結局俺は片思いキャラで終わるかよ。まいったのなー。」

出た。山本ポーズ。

ちなみにヒバリさんもトンファー構えてる。

あれ？獄寺くんが静かだよな。

「ぐすっ！一番微妙なキャラって俺じゃないっすかあー!!」

そこへ雨紗ちゃんが窓から現れた。

「今日で最後らしいね。私、梶平雨紗は永遠に雲雀恭弥一筋な事を誓います！」

「と言っわけらしいからね。行こつ雨紗。」

「うん！」

二人はバイクで走り出した。

「ねえ。二人とも雨紗ちゃんなんてやめた方がいいよ。」

「一気に目が覚めたのな。」

「俺は…十代目一筋ですから。」

「ランボさんとうじょー！」

こうして学ランと兎は皆に認められましたとさ。

「えー！？本当に終わり！？」

ポンと山本はツナの肩に手を置いた。

「終わり良ければ全て良しだぜ！」

「宿題やりました？」

「あー！忘れてたあ！」

「手伝うつす！」

日常。

それはつまらない平和な日々。

彼らには近い未来、厳しい試練が来るであろう。

【完】



## そして始まる（後書き）

スカッとしないうつわりになったことお詫び申し上げます。

バトルな話はまだまだ勉強が必要になってきます。

これからも頑張っていきます。最後までありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5164t/>

---

学ランと兎

2011年10月9日19時24分発行